

ともに挑む。ともに実る。

MIZUHO みずほ銀行

2024年7月1日

みずほディーラーズアイ (2024年7月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 155.50 ~ 165.50

金融市場部 グローバルFIチーム 川端 規雄

■ 先月の為替相場

6月のドル円は157.20円近辺でオープンし4月末の高値(160.24円)を超えて1986年以来の水準まで円安進行。

序盤は、前月末の米指標(個人消費、シカゴPMI)の下振れを受けた米金利低下により軟調な地合い。続く米5月ISM製造業も市場予想を下回り、ISM新規受注が2022年6月以来の落ち込みとなったことを受けて米金利低下と共にドル売りが強まる展開。4日米4月JOLTS求人件数が市場予想を下回り2021年以来の水準に低下したことで「6月会合での日銀国債減額」報道と相俟って一時154円台半ばまで続落。5日米5月ADPも市場予想を下回ったものの米5月ISM非製造業の上振れにより相殺。その後、植田日銀総裁から上記報道を追認する発言があったものの中村日銀委員「国債購入減額は時間をかけ進めることが適当」等もあり円金利が低下しドル円は下げ渋った。7日米5月雇用統計は、一転市場予想を大幅に上回る結果(+272K、予想+185K)、米金利が急伸しドル円は155円台前半から157円上回る水準まで大幅に上昇。翌10日週は、欧州議会選挙での極右政党躍進を受けた仏下院解散により欧州通貨中心にリスク・オフ・ムードが広がったがドル円への影響は限定的。12日米CPIの下振れにより再び155円後半まで値を下げたものの、続くFOMCのドットチャート引き上げ(24年末中央値5.125%、年内利下げ1回)を受けたドル買いによりあっさり157円台を回復。注目された日銀会合では、事前に幅広く報じられた通りに「長期国債買い入れを(相応の規模で)減額していく方針」が決定されたものの、「今後1~2年の具体的な減額計画」は次回7月会合で決定としたことで、158円台までドル円は上伸。

翌17日週は、週半ばに米休日を挟み動意は限られる中、マスター・クリーブランド連銀総裁「インフレへのリスク“まだ上向き”」やカシュカリ・ミネアポリス連銀総裁「インフレ鈍化の更なるエビデンスが必要」等を受けて緩やかなドル高基調が継続。18日米5月小売売上高が市場予想を下ったものの21日早朝に米財務省が「半期経済・為替報告」の中で、日本を為替操作国の「監視リスト」に追加したことが曲解され、介入警戒感の一時的な後退によって2か月ぶりの円安水準を伺う地合いに転換。最終週24日は、6月日銀会合の「主な意見」が公表され「物価の上振れリスク」や「適時の政策金利引き上げ」が示されるタカ派的な内容であったが、月末受給に押される格好で160円を突破し、5月の介入によって押し下げされた値幅を打ち消す格好でドル円は1986年以来の水準まで円安が進行。

■ 今月の見通し

今月のドル円は円安基調の継続、介入を警戒しながら高値更新・じり高の展開を予想。

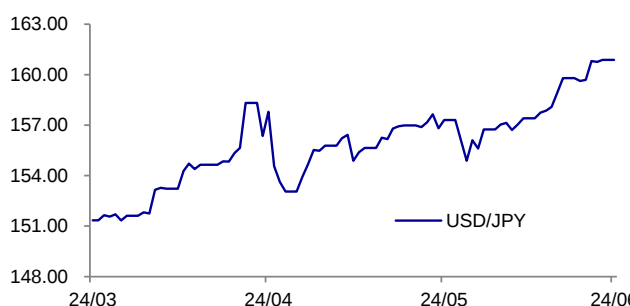
6月下旬の米財務省による為替操作国「監視リスト」への追加が2か月ぶりに160円を突破するきっかけとなったが、これは3基準のうち2基準(「対米黒字(150億以上)」「GDP比3%以上の貿易黒字」)に該当した為であり、4~5月に実施された為替介入自体がその要因ではない。今般の本邦の為替介入が自国通貨売りではないことを理由として米財務省から「為替操作には該当しない」との異例の補足が報じられたものの、その後も円安が勢いを増しており基調としての円安地合いは非常に根強い。足元のドル円上昇がスピードを伴っていないことも市場参加者の介入警戒感を後退させる要因であり、直近の介入によってその影響度合いと持続性が判明している点も円安トレンドからの転換を困難にさせる要因の一つ。

6月のFOMCではドットチャート引き上げにより年内利下げ回数が1回に減少したが、インフレ指標鈍化の見通しを理由として市場は引き続き複数回の利下げを織り込んでおり、ブラックアウト明けの複数のFRB要人発言により「単月ではなく複数のインフレ指標確認の必要性」「指標ドリブンのスタンス継続」が確認できているため6月序盤のように米指標の下振れが続くようであれば、米金利低下を理由にドル円相場の軟化はあり得る。

注目の7月日銀会合(30日、31日)では、6月会合で決定した減額方針の具体的な計画が明らかになるが、6月下旬に公表された「主な意見」では、追加的な材料は得られておらず、7月9日~10日の2日間で開催予定の臨時の「債券市場参加者会合」において債券関係者からの意見を聴取し、民間の国債消費余力も勘案しながら向こう1~2年程度のQT規模を見定めていく公算。既に報じられている月額5兆円程度への減額規模との比較感や実際の円金利動向によって円安基調の持続性を推し量ることになるが、減額方針自体が決定された6月会合以降のドル円相場の値動きや、減額規模が観測記事として報じられた際のドル円の反応が極めて限定的であった点を勘案すれば、円安基調の転換は想定しづらい。報道されている新NISA等の家計による持続的な円売りも無視できない規模であり円安トレンドの継続がメインシナリオ。

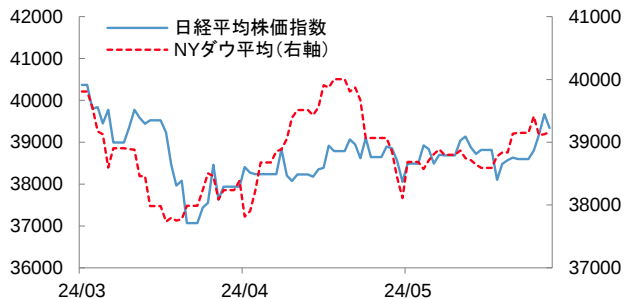
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	ISM製造業景況指数	5月	49.5	48.7	49.2
6/4	JOLT求人件数	4月	8350K	8059K	8488K
6/5	ISM非製造業景況指数	5月	51.0	53.8	49.4
6/7	非農業部門雇用者数変化	5月	180K	272K	175K
6/7	失業率	5月	3.9%	4.0%	3.9%
6/7	平均時給(前月比)	5月	0.3%	0.4%	0.2%
6/12	CPI	5月	0.1%	0.0%	0.3%
6/12	CPI(除食品・エネルギー)	5月	0.3%	0.2%	0.3%
6/12	FOMC	-	5.25-5.50	5.25-5.50	5.25-5.50
6/18	小売売上高	5月	0.3%	0.1%	0.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	10名	164.50 ～ 156.50	ベア	4名	162.50 ～ 155.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	163.50 ～ 155.00	米国の景況感鈍化や日銀の金融政策変更の思惑、燦る本邦通貨当局による介入警戒感を踏まえるとドル円の上値は限られよう。また、投機筋の円ショート積み上がりやクロス円の過熱感も調整をサポートする公算大。	松永	ブル	162.00 ～ 157.00	米国では労働市場と個人消費に陰りが見られるものの、インフレ鈍化は依然道半ば。FRB高官の発言を見てもインフレ鈍化には時間を要するとの認識が多く示されており、7月会合で利下げの具体的な道筋を示す可能性は低いとみる。
河合	ブル	162.00 ～ 155.00	4・5月での介入実績と最近の介入警戒感の高まりを勘案すれば、5－7円程度の調整の可能性は高いとみているが、調整後は月末開催予定の日米中銀イベントまで、絶対的な日米金利差を意識したジリ高の展開を予想。	大熊	ブル	164.00 ～ 157.00	足元のドル/円上昇は急激なものではない、と見る向きが多く、円買い介入は入りにくい。それを見越して投機的な円売り圧力が強まっている感もあり、ドル/円は上値を試す展開を予想。
川端	ブル	165.50 ～ 155.50	6月会合での国債買入減額方針決定やタカ派的な「主な意見」に対する円買いは限定的であり、FOMCのドットチャート引き上げと相俟ってドル円の地合いは不変。介入警戒感も燦るが上昇トレンド継続は前提。	范	ベア	163.00 ～ 155.00	直近の経済指標は米景気減速を示すものも確認されており、為替介入警戒感も燦る中、ドル円は上値重く推移すると予想。加えて、円安が続く状況では日銀の金融政策変更の思惑も走りやすい。
加藤	ベア	162.00 ～ 152.00	1990年の160円台への円安は、日米貿易不均衡の是正をテーマに240円から120円まで売り込まれた反動であって決して買われ過ぎではなかった。しかし、足許の円安は多くの円安要因があったにしても短期間に買われ過ぎの状態。	伊藤(基)	ブル	165.00 ～ 155.00	ジリジリと時間をかけてドル円が上昇する分には、財務省も為替介入に踏み切ることは出来ないであろう。その結果、160円半ば付近まで上昇する余地が大きいとみている。もっとも、このシナリオは7月会合で追加利上げをしないことが前提
山崎	ブル	165.00 ～ 156.00	日米の金融政策の違いを背景に円安が続くものと予想。次回のBOJまではこの流れが続くものと想定するが、当局の動向・米経済指標の内容には注意。	鈴木	ブル	164.00 ～ 158.00	米国は雇用環境が好調、Fed高官も依然利下げ開始に慎重な姿勢を崩しておらず、当面政策金利は高止まりが想定される。既に次回会合での国債買い入れ減額が織り込み済みの日本との差は大きく、引き続き底堅い推移を予想。
山口	ベア	161.50 ～ 157.00	6月に38年ぶりの高値を付けたが、Fedの年内利下げ・日銀による引き締め検討など市場環境は変わっていない。ドルを買い進めていく材料はなく、ドル円の上値は重くなると予想する。	西	ブル	163.00 ～ 156.00	米国では年2回の利下げが織り込まれているが、FRB高官は未だ利下げに慎重であり後ズレ懸念はある。本邦では7月会合にて国債買入れ減額や利上げが期待されているが期待を超えるハードルは相応に高い。一時的な下押しに留まるか。
田川	ブル	165.00 ～ 157.00	底堅い展開を想定。日銀のQT規模、米インフレ動向など気になるポイントはあるものの、ドル/円上昇トレンドを反転させるには材料不足か。月末の政策イベントを控え、放っておけば円安。介入があれば絶好の買い場と考えたい。	松木	ブル	165.00 ～ 157.00	米国内の失業率の上昇や米個人消費の悪化など米景気に対するネガティブな材料もあるが、金利・需給ともに円の弱さは変わらぬ以上、ドル円の下落は限定的。むしろ押し目買いにドル円は上昇する展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0500 ~ 1.0850
EUR/JPY 168.50 ~ 175.00

金融市場部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

■ 先月の為替相場

6月のユーロドルは序盤こそ上昇も、その後はFRBのタカ派姿勢を受けたドル高やフランスを中心とした欧州の政治不安を背景に下落した。

(第1週) 週初3日、1.0853でオープンしたユーロ/ドルは、ユーロ圏5月製造業PMI(確報値)の弱い結果に1.08台前半まで軟化後、米金利低下が支援材料となり1.09台まで急伸した。4日、ユーロ/ドルは月中高値の1.0916を付けた後、独金利低下や欧州株の軟調推移を背景に1.08台半ばに続落。その後、米経済指標の弱い結果が好感され、1.08台後半に反発。6日にはECB政策理事会が▲25bpの利下げを決定。ただ、声明文で追加利下げの示唆が無かったことや、インフレ見通しの引き上げがタカ派的と解釈され、瞬間的に1.09台に乗せた。もっとも、その後は水準を戻し、1.08台後半で推移し引けた。7日、発表された米5月雇用統計が市場予想を上回ったことを受けた米金利急騰・ドル買いに一時1.08台割れまで下落した。

(第2週) 10日、フランスを巡る政局不透明感の高まりからユーロ売りが強まり1.07台前半に下落も、ラガルドECB総裁による追加利下げに慎重な発言が下支えとなり、1.07台後半に値を戻した。さらに12日に発表された米5月CPIの弱い結果が支援材料となり一時1.08台半ばに急伸も、その後タカ派的なFOMCの結果を受け、1.08台前半に値を戻すなど往って来いの展開。独金利低下や欧州株の軟調推移に加え、欧州周辺国金利の対独スプレッド拡大などが嫌気されると、14日には1.06台後半に下落。

(第3週) 17日、米金利上昇が重しとなり1.06台後半で推移するも、フランスを巡る政局不安の緩和からこことも軟調推移していた欧州株が持ち直し、1.07台前半に反発した。18日-20日、ユーロ/ドルはEU各国における財政赤字への懸念が台頭もあったが、総じて1.07台での推移となった。ただし、21日に発表された独仏6月PMI(速報値)が製造業、サービス業ともに市場予想を下回ったことを受け再び1.06台後半まで下落した。

(第4週) 24日-25日、1.07台で上値重い推移となった。26日、ECB高官のハト派な発言や月末のドル買い需要も相まって今月の安値となる1.0666まで下落。27日、仏株価は下落したものの、米経済指標発表後の米金利低下が下支えとなり1.07台を回復した。29日、月末のドル買い需要に再び1.07割れまで下落し、1.06台後半での推移となっている。

■ 今月の見通し

今月のユーロは欧米の金融政策の違い、フランスの下院選挙、その後の政局不透明さも相俟って上値重い展開を予想する。

ユーロ圏の金融政策については、先月のECB政策理事会では基調的なインフレが緩和していることを材料に利下げを実施。もっとも、賃金データ等で得られる国内の物価上昇圧力を理由に四半期毎のインフレ見通しが総合・コアともに3月時点対比で上方修正がなされた。また、ラガルドECB総裁を始め、その他複数のECB高官はデータを慎重に見極める姿勢を示している。以上を受けて、7月のECB政策理事会では政策金利据え置きがコンセンサス。その為、7月理事会では市場が60%超織り込んでいる9月利下げに対して何らかの発信があるかに注目が集まるだろう。一方で、先月発表された欧州各国PMIや独5月IFO企業景況指数などユーロ圏の景気悪化懸念を示唆する指標の発表が相次いでいる。インフレ動向は最重要だが、景気後退懸念の台頭は、7月以降の理事会での利下げ織り込み進行をサポートする公算大。景況感の鈍化は、ユーロ安要因となろう。

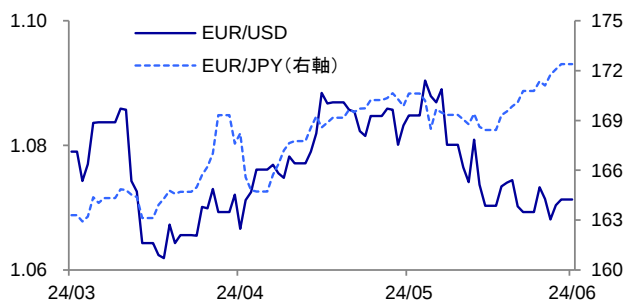
今後の利下げに対するスタンスがインフレのデータ次第と中立的な姿勢を示しているが、利下げを実施したことは事実。FOMCで示されたようにFRBがタカ派姿勢を維持している以上、この金融政策の違いに着目したユーロ売りがユーロの上値を抑えるだろう。

また、フランス発の政治情勢については、マクロン仏大統領は6月9日に議会解散を決定、7月7日に決選投票が実施される予定。現在のRNは極右政党でありながら、フレグジットやユーロ離脱を前面に押し出すような極端な主張を展開しているわけではなく、RNの指導者ルベン氏も下院選で勝利したとしてもマクロン大統領を追い出すつもりはないと述べている。係る状況下では市場が想定するフレグジットやユーロ離脱等の混乱は想定しづらい。もっとも今後に対する不透明感からユーロを積極的に買う地合いとは言えない。

最後にFRBのタカ派姿勢は6月のドル高(ユーロ安)要因となったが、米5月雇用統計、米5月CPIでは失業率の上昇、インフレ鈍化を示すなど不安材料もある。今月も同様のデータが示されるとドル高一辺倒の展開は想定し難くユーロの下支え要因となると予想する。

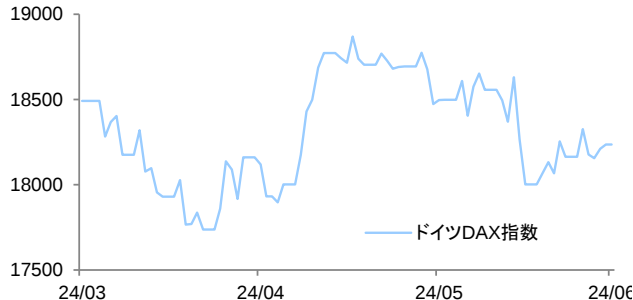
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/5	ユーロ圏PPI	5月	-5.3%	-5.7%	-7.8%
6/6	ECB主要政策金利		4.25%	4.25%	4.50%
6/12	独CPI	5月	2.4%	2.4%	2.4%
6/18	独ZEW景気期待指数	6月	50.0	47.5	47.1
6/18	ユーロ圏CPI	5月	2.6%	2.6%	2.4%
6/18	ZEW景気期待指数	6月		51.3	47.0
6/20	ユーロ圏サービス業PMI	6月	53.4	52.6	53.2
6/20	ユーロ圏製造業PMI	6月	47.9	45.6	47.3
6/24	独IFO企業景況感指数	6月	89.6	88.6	89.3
6/27	ユーロ圏消費者信頼感	6月	-	-14.0	-14.0

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	3名	1.0900 ～ 1.0600	ベア	11名	1.0850 ～ 1.0500
※ レンジは中心値					

宮地	ベア	1.0850 ～ 1.0400	米欧金融当局とのスタンスの差異や欧州の政治情勢を勘案するとユーロを積極的に買い進める局面とは言い難い。また、クロス円の調整がユーロの重石となるリスクにも留意したいところ。	松永	ブル	1.0950 ～ 1.0650	ECB高官は、年内複数回の利下げに意欲を見せるものの、サービス部門の中心に欧州のインフレ再加速の懸念は強い。フランスの政治リスクは警戒も、経済の底打ち感もみられる中、ユーロは底堅い動きとなろう。
河合	ブル	1.0800 ～ 1.0600	仏政治イベントは注視する必要があるが、下値を探る動きは限定的で、ドル主導で方向感の出ないレンジ相場を予想する。欧州の良好な需給構造はユーロドルのサポートとなり、目線はややブル。	大熊	ベア	1.0850 ～ 1.0450	欧州経済は景気底入れの兆しが見えるものの、政局の先行き不透明感が重しになると思われる。フランスを始めとして極右政党の躍進が続けば、リスクオフでユーロは軟調な動きを予想。
川端	ベア	1.1000 ～ 1.0500	極右政党の躍進と仏議会選挙の不確実性がユーロドルの上値を押さえているが、6月のECB理事会では当面の金融政策をデータ次第としており、早期の追加利下げは想定しづらい。波乱なければ中期レンジ内で反転上昇を予想。	范	ベア	1.0800 ～ 1.0400	欧州の政治不安や米国との金融政策スタンスの違いからユーロは引き続き上値重く推移すると予想。FRB同様、ECBも金融政策の方向性はデータ次第となろう。
加藤	ブル	1.0900 ～ 1.0600	ECBは利下げに舵を切ったもののユーロ圏経済は思いのほか粘り強いことは明らかになってきており、欧州政治情勢不安を背景にしてもユーロの下げは限定的と考える。ECBの利下げペースは極めて緩やかなものになると思う。	伊藤(基)	ベア	1.0900 ～ 1.0600	フランス政治の決着が着くまでは不安定な相場環境が続くだろうが、選挙を乗り越えてしまえば、材料出尽くしから持ち直す展開を想定。追加利下げに前向きな姿勢を出しづらい環境もユーロを支援する材料になるだろう。
山崎	ベア	1.0900 ～ 1.0500	ユーロドルは軟調方向を予想。ECBが先行きは別としても、金融政策の方向転換を決定したことや、仏の政局懸念から、EUR安を予想。ただし、下値は限定的と考える。	鈴木	ベア	1.0850 ～ 1.0500	フランスを中心とした政治不安や景気動向への懸念は依然として大きい。米国に先駆けて利下げを開始したECBの緩和姿勢も、ユーロの上値を押さえる要因となるだろう。
山口	ベア	1.0800 ～ 1.0600	欧州圏はインフレ圧力は緩和しており、今後も四半期毎の利下げ実施が既定路線となっている。7月に発表される経済指標の悪化が確認されると想定より早いペースでの利下げ実施の可能性もあり、その場合はEURの上値を抑える。	西	ベア	1.0800 ～ 1.0500	6月会合以降、連続的な利下げは期待しづらい状況。一方、フランスにおける極右政党の台頭など、政局不安が続く。財政拡張路線の国民連合が議席を伸ばし、EUの財政規律が乱れるリスクが大きく、ユーロ売りの材料となろう。
田川	ベア	1.0850 ～ 1.0450	直近のECBでは今回の利下げをデータ次第と示し、タイミングについて明確なコンセンサスはないのが現状。フランスの政局問題も勘案、上値の重い展開の継続を想定。	松木	ベア	1.0850 ～ 1.0500	ECBの今後の利下げに対する慎重姿勢はユーロの下支え要因となるものの、利下げを実施したことは事実であり、フランス発の政情不安と相俟って対ドルでは上値重い展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.2800
GBP/JPY 200.00 ~ 208.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

6月の英ポンド相場は、27日時点で対ドルでは約▲0.3%下落した。第1週のポンド相場は上下に振れ幅を伴う展開となったものの、1週間を通してみれば、対ドル1.2740をはさんでほぼ横ばいとなった。3日公表の米5月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ったことでドル売りとなった一方、7日公表の米5月雇用統計での非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回る結果となり、ドル買いが進行した。ポンド相場は個別の材料に乏しかったが、6日に公表された英企業調査(DMP)では、1年インフレ率予想は+2.9%で、4月の+2.9%から変わらなかった。市場予想では+2.8%への低下が見込まれていたなかで、インフレの粘性性への懸念が企業のCFOの間でも根強いことが示された形だ。第2週のポンド相場は対ドルで約▲0.2%下落。12日に発表された米5月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回る結果となったことを受けドル安が進み、ポンドもそれに合わせて上昇する場面もあったが、週後半にはフランスの政治情勢を巡る混乱が意識されるかたちで、ユーロ圏以外にも幅広く下落圧力が波及した恰好だ。英国の経済指標では、11日に2〜4月の失業率が発表され、結果は4.4%と2021年半ば以来の高水準となった。民間部門の賃金は前年比+5.8%と過去2年で最小の伸びとなった。第3週のポンド相場は対ドルで続落。5月英CPI発表後に上昇、翌日のBOEの政策発表後に下落の流れとなった。また、堅調な米経済指標や、米高官のタカ派発言も、対ドルでのポンド軟調に寄与した形だ。19日に発表された5月英CPIは前年同月比+2.0%と、市場予想に一致。4月の同+2.3%から低下し、BOEのインフレターゲット(前年比+2%)以内へのCPIの伸び率低下は2021年7月以来、約3年ぶりとなる。もっとも、サービス価格の伸び率が前年同月比+5.7%と高止まりが続いている。20日のBOE金融政策決定会合では政策金利が市場予想通り5.25%で据え置かれたものの、声明文や議事要旨の中で、8月会合での利下げに一部委員が傾いていることを示す兆候が見られた。第4週のポンド相場は週初にいったん対ドルで+0.5%と持ち直したものの、月末を控えたドル買いと見られる動きや、週末にフランスの総選挙の第一回目の投票を控えた不透明感もあり、26日には急速に上昇幅を失う展開となっている。

■ 今月の見通し

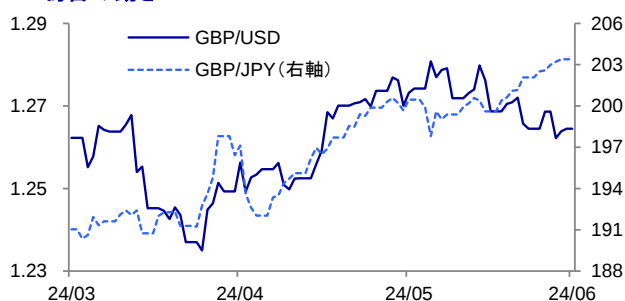
7月のポンド相場は、対ドルで軟調な展開を見込む。引き続き8月会合でのBOEの利下げ観測が対ドル相場での重しとなりそう。また、フランスの政治情勢・財政の不透明感もユーロ圏のみならず英国を含む欧州金融市場にとつてリスク要因となりうる。もっとも、ポンドはユーロや円といった他の主要通貨に対しては底堅く推移すると見ている。6月の英ポンド相場は27日時点で対ドルでは約▲0.3%下落した一方、対ユーロでは約+1.1%、対円では約+1.7%上昇している。対ドルでの下落は、米経済指標の堅調さや米高官のタカ派発言を受けたグローバルなドルの強さの裏返しという側面が大きいと見られる一方、その他の主要通貨に対しポンドが堅調推移を続けているのは、英国のサービスインフレの根強さを考慮すれば、BOEの政策金利が高止まりしやすいという見方が背景にあるだろう。改めてBOEの6月会合を振り返ると、たしかに想定よりもハト派的な要素が目立った印象だ。特に、議事要旨では、BOEが5月に公表した見通しと比較してサービスインフレ率の高止まりが続いていることについて、一部委員から「デイスインフレ軌道の見通しを大きく変えるものではない」、「利下げ回避決定は、微妙なバランス」という見解が示されたことが注目される。当面、2024年7〜9月期まではBOEの早期利下げ観測がポンドの上値を押さえるだろう。もっとも、英国のサービスインフレは、同国の産業構造の特徴(労働集約的なサービス業の比率が主要先進国の中で顕著に高い)や、労働市場のボトルネック(BREXITに伴い低賃金労働者の新規流入が低迷)を考慮すれば、高止まりしやすい。翻って、BOEが他国比で相対的に高水準の政策金利を維持しなければなくなる可能性は高く、2024年10〜12月期以降は、高金利政策の持続への期待が再びポンドのサポート要因となるだろう。7月4日に控える総選挙では、各種世論調査から労働党の圧勝と保守党からの政権交代が確実視されており、サブプライズの余地は小さいだろう。ただし、国民保険サービス(NHS)改革や、移民管理など、労働党が国民に改善を約束している政策は、いずれも資金が必要となる。「影の財務相」レイチェル・リース氏はらは増税の可能性を否定しているものの、どこに財源を求めるのか、という問題は残る。総選挙後は英国の財政状況に改めて市場の関心が集まるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』
ロンドンにきたばかりの頃、一時滞在時のホテルでは毎日、「イングリッシュ・ブレックファスト」を食べていました。ベーコン、ソーセージ、卵(スクランブルエッグ)、ブラック・プディング、マッシュルーム(巨大!)、トマト、バイクド・ビーンズと食パンをあわせたもので、一枚の皿に盛るとなかなか豪華さです。「なんだ、英国の食事も悪くないじゃないか」と感じたのを覚えています。とはいえ、「英国の朝食」という仰々しい名前がついていますが、別に英国人が毎日、これを食べているわけではなく、自分の家で作っているわけでもないようです。ホテルに泊まった時など食べたり、週末にカフェやパブなどに出かけて食べたりするのが一般的な、いわばよそゆきの食事のようです。我が家の朝食というと、「イングリッシュ・ブレックファスト」とは程遠く、ごはん味噌汁、納豆、と完全な「ジャパニーズ・ブレックファスト」です。駅前に日本の食材店があるほか、デリバリーで日本の食材を送ってくれるサービスも充実しています。少々値ははるものの、ロンドンでは日本の食材へのアクセスが良いことは舌が日本食に馴染んだ私の家族にとってだいぶ助かっています。

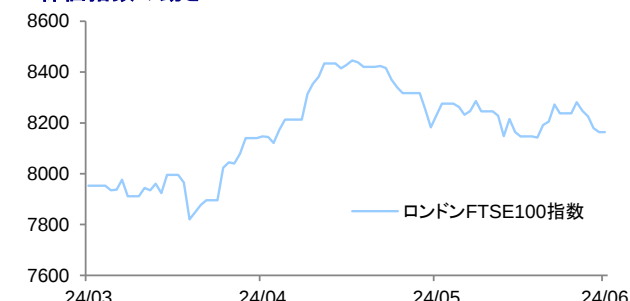
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/11	週平均賃金(前年比)	4月	5.7%	5.9%	5.9%
6/11	失業率	4月	4.3%	4.4%	4.3%
6/12	GDP	4月	-0.1%	0.0%	0.4%
6/12	鉱工業生産(前月比)	4月	-0.1%	-0.9%	0.2%
6/12	製造業生産(前月比)	4月	-0.2%	-1.4%	0.3%
6/19	CPI(前年比)	5月	2.0%	2.0%	2.3%
6/20	イングランド銀行政策金利		5.25%	5.25%	5.25%
6/21	小売売上高(前月比)	5月	1.8%	2.9%	-1.8%
6/21	製造業PMI	6月	51.1	51.4	51.2
6/21	サービス業PMI	6月	53.0	51.2	52.9

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6550 ~ 0.6760
AUD/JPY 102.50 ~ 108.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

6月の豪ドルは中旬に月間安値0.6576を付けた後、0.67台乗せとはなったがレンジ内での推移。概ね0.66台で推移した。3日、米5月ISM製造業景気指数が予想を下回り、ドル売りを背景に0.6690近辺まで上伸。4日、豪1〜3月期経常収支が予想に反して赤字となると豪ドル売りへと転じた。5日、豪1〜3月期GDPが予想比小幅に下回る展開となったものの前期分の上方修正もあり、豪ドルは上昇。但し、堅調な米5月ISM非製造業景気指数でドル買いに傾倒すると0.6627まで下落した。7日、堅調な米5月雇用統計を受け、米金利が上昇すると一時0.6579まで急落。10日、前當日の流れを引き継ぎ、0.6576まで下落。12日、米5月CPIが予想を下振れ、ドルが大きく下落。豪ドルは0.6610近辺から0.6705まで上昇した。その後、FOMCが政策金利を5.25〜5.5%に据え置く事を決定し、メンバーによる見通しで年内利下げ回数が前回の3回から1回(▲25bp)に予想が変更されており、タカ派的な修正と捉えられ、ドル買い戻しの動きから0.6660近辺での推移となった。13日、豪5月雇用統計は就業者数が予想を上回り、失業率は前月から低下。労働市場の堅調さを示す結果となったが、来年以降の利下げを想定する市場にとっては想定外の範囲内で、大きな材料とならず、影響は限定的だった。米5月PPIが予想を下振れ、ドル売りとなり、一時0.6675まで上昇もすぐ反落。17日、仏政局不安を背景としたリスクオフの動きから債券に買いが集まり、豪金利が低下する中0.6586まで下落。18日、RBAは政策金利据え置きを決定。声明文ではインフレ上昇リスクの警戒を再認識し、ブロック総裁会見で今回利上げを検討した事が明らかとなり、豪ドル買い優勢に。21日、米6月PMI製造業、サービス業ともに予想を上回り、ドル買いから0.6640近辺まで下落した。25日、0.66半ばから0.6627までじりじりと売られたが、デリーSF連銀総裁が「今後労働市場が減速すれば、失業率の上昇につながる可能性がある」と発言した事で米金利が低下すると豪ドルは買いが優勢となり、0.6660近辺まで上昇した。27日、豪5月月次CPIは前年比4% (前回3.6%)、CPIトリム平均値も前年比4.4% (前回4.1%) 加速した。これを受けて市場が織り込む年内利上げ確率は40%程度まで上昇。豪国債利回りが大きく上昇し、豪ドルは一時0.6688まで上昇。月末にかけてドル円が1986年来の高値161円台まで上昇する中、本邦当局による介入再開への警戒感が高まり、米国債売り(金利は上昇)となった事を背景に、ドル買いとなり、豪ドルは0.66半ばまで下落。その後は0.66台後半へ戻して越月した。

■ 今月の見通し

7月の豪ドルは僅かに値幅を切り上げる可能性がある。弱含む中国株や地政学リスクの再燃は引き続き残るが、豪州国内では新年度が始まる7月から、最低賃金の引き上げや、所得税減税、連邦政府による一部電気代補助などの制度変更が実施される事を背景に幾分消費を押し上げる可能性がある。そうなればセンチメントや消費関連指標の改善が期待できるほか、インフレと金利の上昇圧力が高まることから豪ドルが支えられ易い環境となるとみる。米豪金利環境に置いては、米国は直近FRBより発表されたドットチャートで利上げ時期を当初の想定より遅らせている模様だが、RBAは年内利上げの可能性を残しており、底堅い展開を期待する。

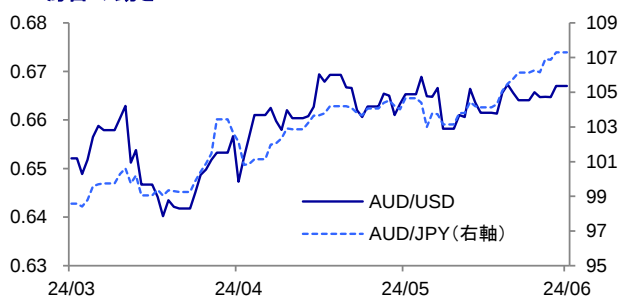
6月の豪ドルは米インフレ指標下振れで米金利低下によるドル売りから、一時0.67台へのせる場面が見られたが、豪RBAによる利下げの市場予想が来年以降であることは織り込み済であるため、豪5月の雇用統計のようにある程度労働市場が底型さを顕示しても、5月月次CPIが4.4%へ加速してもそれ以上の豪ドル買いが沸いてきにくい環境下であるため、レンジでの推移が続いた。6月は対前月で0.6576まで下値を切り上げる事には成功したものの、0.67台定着とはならなかった。レンジ全体が切りあがるかを占う上で0.67台定着ができるかが一つの焦点となろう。

7月の注目材料としては、2日(火)RBA6月会合議事録要旨発表、3日(水)豪5月小売売上高、FOMC議事要旨、5日(金)米6月雇用統計、11日(木)米6月消費者物価指数、18日(水)豪6月雇用統計、25日(木)米4〜6月GDP、同個人消費、同コアPCE価格指数、26日(金)米6月PCE価格指数等が発表予定。現段階で、豪短期金融市場では8月に25bpの利上げが行われる可能性を約40%、9月までに約60%が織り込まれている。7月は当局が利上げの必然性に関する証拠集めに余念がなくなるとみる。上に挙げた豪指標とともに、当局者発言にも留意し、底堅い豪経済を示すような内容が出てくれば、豪ドルはさらに押し上げられる可能性が高い。

豪ドル円に関しては豪ドルがほぼレンジ、もしくは下値切り上げで推移する事から、ドル円の動きに追随する可能性が高い。106円台からの上伸で108円台乗せを予想する。

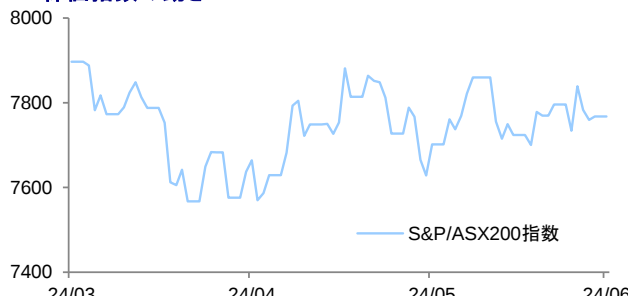
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/4	国際収支:経常収支	1Q	A\$5.2b	-A\$4.9b	A\$2.7b
6/5	GDP (季調済/前期比)	1Q	0.2%	0.1%	0.3%
6/6	貿易収支	4月	A\$5400m	A\$6548m	A\$4841m
6/13	雇用者数変化	5月	30.0k	39.7k	37.4k
6/13	失業率	5月	4.0%	4.0%	4.1%
6/13	正規雇用者数変化	5月	-	41.7k	-7.6k
6/13	非常勤雇用者数変化	5月	-	-2.1k	45.0k
6/18	RBAキャッシュレート	6月	4.35%	4.35%	4.35%
6/26	CPI YoY	5月	3.8%	4.0%	3.6%
6/27	Job Vacancies QoQ	5月	-	-2.7%	-6.2%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3400 ~ 1.3900
CAD/JPY 113.00 ~ 119.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

月初、米経済指標の結果はまちまちで、FRBの利下げ開始時期の不透明感が払拭されない中、米金利低下に連れ、USDドルが弱含んだ。しかし、カナダでは第1四半期GDPが冴えない結果となり、カナダ中銀の早期利下げ観測が高まったことによるカナダドル売りが進んだことで、USDドルの下値は限定的となった。

3日発表の米5月ISM製造業景況指数が、2か月連続で分岐点となる50を下回りUSD/CADは1.3603まで下落。また、OPECプラス会合で自主減産縮小が決定されたことを受け、カナダドル売りが進んだ。5日のカナダ中銀金融政策決定会合では、政策金利が予想通り25ベース引き下げられ、4.75%に決定された。カナダ中銀マックレム総裁から、“インフレが更に緩和した場合は、追加利下げを期待するのが妥当”とのハト派発言があり、カナダ2年物国債の利回りは2月以来の4%を割り込み、カナダドルがUSDドルに対し、1.3741まで売られる場面が見られた。しかし、米JOLTS求人件数や米新規失業保険申請件数が悪化したことを受け、米経済が減速しているとの見方が強まり、上値は重く1.36台半ばへと反落。7日、米5月雇用統計では、非農業部門雇用者数が予想を大きく上回り増加。平均時給も前回から伸びが加速し、米経済の堅調さが示された。FRBの利下げ開始時期が後ずれするとの観測が強まり、USD/CADは1.37台半ばへと急伸。その後もUSDドル高の流れが続き、11日には月間最高値となる1.3792まで上昇。しかし、12日に米5月消費者物価指数(CPI)の上昇率が予想を下回ったことを受け、米長期金利が低下し、USD/CADは1.36台後半まで下落。同日午後のFOMCでは、政策金利が予想通り据え置きとなった。経済・金利見通しではタカ派的な内容が示されUSD/CADは1.373付近まで反発。その後も米FRB当局者から早期利下げ開始を牽制する発言が続き、USDドルを下支えした。13日の米5月生産者物価指数(PPi)は予想を下回り低下し、インフレ減速が示された。18日の米5月小売売上高が予想を下回り、前回分も下方修正されたことや、原油価格上昇によるカナダドル買いも相まって、USDドルは軟調推移。21日にはUSD/CADは1.37を割り込んだ。25日のカナダ5月消費者物価指数(CPI)は総合、コア共に予想を上回る強い結果となり、カナダ中銀7月の利下げ観測が後退。カナダドルが買われ、USD/CADは1.36台前半へと下落。その後月末にかけては、市場は米5月個人消費支出(PCE)価格指数の発表待ちで、様子見ムードが続きUSD/CADは1.36台半ばから後半での小幅な値動きを続けた。

■ 今月の見通し

6月5日に行われたカナダ中銀金融政策決定会合の議事要旨では、理事会は7月まで利下げを待つことを検討していたが、物価圧力の緩和が続いていることを示すインフレデータや、その他の経済指標により、6月の利下げを決定したことが明らかになった。マックレム総裁からは、2022年と2023年に引き上げた時ほど迅速に金利を引き下げることはないとの言及があった。更なる金利引き下げのタイミングは、“データ次第”とし、会合毎に決定され、引き続き需給のバランス、インフレ期待、賃金上昇率、企業の価格設定に注視することが強調された。

また、マックレム総裁は、カナダ経済が失業率の大幅な上昇なしに、インフレ率が中銀の目標に戻るソフトランディングに向けて順調に進んでいるようだとの見解を示したが、労働市場については、今後失業率はさらに上昇する可能性があるとの見解を示した。

市場では、年末までに少なくともあと2回程度の利下げがあると予想している。5月の消費者物価指数(CPI)の予想を上回る強い結果を受け、市場では7月24日会合での利下げ観測が後退しているが、会合前に発表される7月5日の雇用統計や16日のCPIの結果によっては、利下げ観測が大きく変わる可能性があるとの見解を示した。

FOMCでは政策金利が予想通り据え置きとなり、注目の金利・経済見通しでは年内利下げ回数は1回に想定されることが示された。声明文ではここ数か月で、インフレは2%の目標に向けての緩やかな更なる進展が見られたとした。

パウエルFRB議長の会見ではインフレ率が持続的に2%に向かっているとの確信を強める為に、データを確認する必要があると言及があった。米指標には強弱入り混じったものが多く見られる。いくつかの雇用に関するデータは弱さが目立ったものの、5月の雇用統計は強い結果となり、米経済の底堅さが示された。

市場ではFRBによる年内利下げは2回とみる向きが多いが、0回との予想も一部にある。

カナダのインフレ加速をきっかけに、各中銀でもインフレ圧力への警戒心が高まっている。カナダ・米国の利下げ時期への不透明感が残り、今後も引き続きデータ次第で一喜一憂する展開が続くと思われる。FRB当局者からのタカ派発言も多くUSDドル高圧力も高い。今月USD/CADは1.34-1.39での推移を予測する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

カナダには朝食やランチの専門店が多くあります。定番メニューと言えば、卵3個にトーストとホームフライ。お好みでベーコンやソーセージなどを追加できます。豚ロースから作られているベーコンは、米国などでカナディアン・ベーコンと呼ばれていますが、カナダではバックベーコン、またはビーミールベーコンと呼ばれています。ベーコンというよりはハムに近いです。

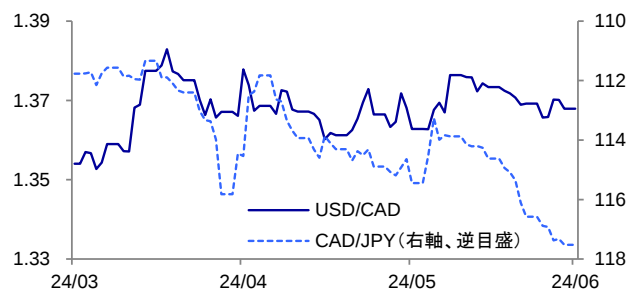
卵はスクランブルやフライドエッグ、オーバー・イージー、サニーサイドアップ、ボーチドエッグなどお好みのスタイルで注文できます。卵には塩と胡椒、ケチャップをかける人が多いと思いますが、HPソースやホットソースを好んでかける人たちもいます。パンの種類は白パン、全粒粉パン、ライ麦パンなどを選ぶことができ、小さな容器に入ったジャムやピーナツバターなどを付けてくれます。あとは賽の目にカットされたホームフライが結構多めに付け合わせられます。コーヒーは飲み放題となっており、お店の人はコーヒーがなくなるころを見計らって、継ぎ足してくれます。もちろんパンケーキやフレンチトーストもカナダらしい朝食です。

カナダは世界一のメープルシロップ生産国なので、メープルシロップをたっぷりかけて食べると思われがちですが、やや値段が高いため、カジュアルなレストランなどではコーンシロップが置かれています。メープルシロップを注文すると別料金がかかります。

平日の朝にカナダで人気のコーヒー店“Tim Horton”に、コーヒーや朝食を買う人たちの長い列ができてるのは、カナダらしい光景です。ベーグル、ドーナツ、マフィンはもちろん、朝食メニューが豊富です。普段忙しく、朝食に時間をかけられない人は多く、シリアルや冷凍のワッフル、トーストなどで、済ませてしまうのが一般的なようです。

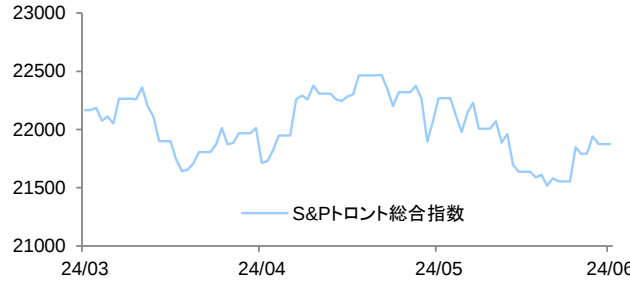
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	5月	--	49.3	49.4
6/5	カナダ中銀金融政策決定会合	6/5	4.75%	4.75%	5.00%
6/7	雇用ネット変化率	5月	22.5K	26.7k	90.4k
6/7	失業率	5月	6.2%	6.2%	6.1%
6/11	住宅建設許可(前月比)	4月	5.0%	20.5%	-12.3%
6/14	製造業売上高	4月	1.2%	1.1%	-1.8%
6/17	住宅着工件数	5月	245.1k	264.5k	241.1k
6/21	小売売上高(前月比)	4月	0.7%	0.7%	-0.3%
6/25	CPI(前月比)	5月	0.3%	0.6%	0.5%
6/25	CPI(前年比)	5月	2.6%	2.9%	2.8%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1360	～	1410
KRW/JPY	11.23	～	11.98
JPY/KRW	8.35	～	8.90

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

6月のドル/ウォン相場は底堅い値動き。月初のドル/ウォンは1,382.0ウォンでオープン。米金利が低下基調で推移したことを材料にウォンは堅調地合いで推移。中国人民元が良好な経済指標を背景に上昇したことや、軟調な米ISM製造業指数、韓国株式市場への資金流入が、ウォン買いをサポートし、週末にドル/ウォンは1,360ウォン台前半まで下落した。

翌週初10日は一転してドル高推移に。7日の米雇用統計が予想を上回り、米金利が上昇しドル買いが進み1,379.5ウォンでオープン。その後もドル/ウォンは底堅い推移が継続するも、週半ばに控える米CPIやFOMCへの警戒から値幅は限定的だった。12日の米CPIではインフレ減速が確認され米金利が急低下。FOMCを経て米金利は下げ止まるも、戻しは限定的で、翌13日のドル/ウォンは1,360ウォン台半ばまで下落した。しかし、14日の日銀会合を経て円安が進行したことを受けウォンも連れ安となり、再び1,380ウォン手前まで上昇した。

欧州での政情不安によるユーロ安なども相まって翌週のドル/ウォンは1,380ウォン台前半でオープン。その後数日は1,380ウォン前後で揉み合い推移が続くも、20日にスイス中銀が予想外に利下げを決定すると、ドルが強含み、翌21日に一時1,393.0ウォンまで上昇した。一方で、1,400ウォンの節目が近づいてきたことから当局による為替介入を警戒してその後は1,380ウォン台後半で推移した。

翌週も同様にドル/ウォンは1,390ウォン付近で米金利動向を眺めながら底堅い推移が継続。日本円や人民元が軟調推移したことを受けてウォンも連れ安推移し、27日には1,395.0ウォンの月高値を記録した。

■ 今月の見通し

7月のドル/ウォンは底堅い推移の継続を予想。

6月のドル/ウォンはドル高が進行したことを受けて約2か月ぶりに1,390ウォン台に上昇し、1,400ウォンの節目も目前に迫る推移となった。ウォン安の要因は複合的であるものの、外的要因による影響が大きく、欧州各地での政策金利引き下げを受けたユーロ安や、日本円・人民元安を始めとするアジア通貨安進行がウォン安の要因として挙げられよう。これら外的要因が解消されなければウォン相場の切り返しは難しい状況が続くと考えるも、欧州では政局不安により一層情勢が不安定になる可能性があるほか、日銀動向に鑑みても直ちに円安が解消に向かう道筋は見通しづらい。7月のドル/ウォンについては1,300ウォン台後半を中心に底堅い推移が継続すると思われ、市場は前回韓国当局が口先介入を行った1,400ウォンを強く意識するも、再度同水準をトライする展開も否定できない。

実需面に目を向けると、韓国の5月の輸出は引き続き好調で、輸出額は前年同月比+11.7%増加。特に最大の輸出品目である半導体は前年同月比+54.5%増加しており、その他IT品目もAI向け需要が牽引し好調に推移。貿易収支も12か月連続の黒字を記録。実需動向がKRW相場へ及ぼす影響は現時点で限定的ながらも、今後外的要因が解消に向かえば、ウォン買いをけん引する材料の一つとなるだろう。

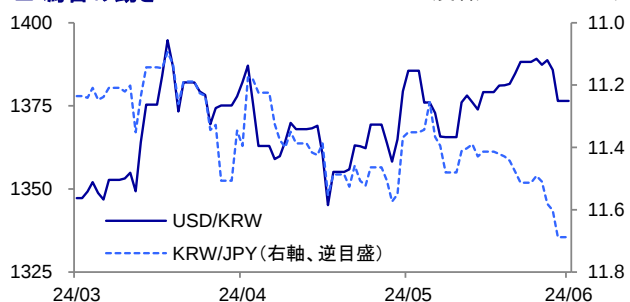
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

韓国での朝食スタイルは特に定まったものは無く、日本と同じくごはん派やパン派の方がいるようです。少し前の調査では韓国の朝食を食べる人の割合は30%程度ともいわれています。朝営業している飲食店も少ないですし、カフェにもモーニングメニューがありません。一方で、朝からアイスアメリカノを飲んでいる人はよく見かけます。韓国にはいたるところにコーヒースタンドがあり、安価でコーヒーを買うことができます。「凍って死んでもアイスアメリカノ」という言葉の略「オルチュガ(얼죽아)」という造語ができるくらい韓国人々はアイスアメリカノを好んでいます。朝食だけでなく、昼食後なども街行く人はアイスアメリカノを持っており、夜でさえコーヒースタンドには人影がちらほら見えます。もはや朝食事情ではありませんが、3食アイスアメリカノという可能性も否定できません。

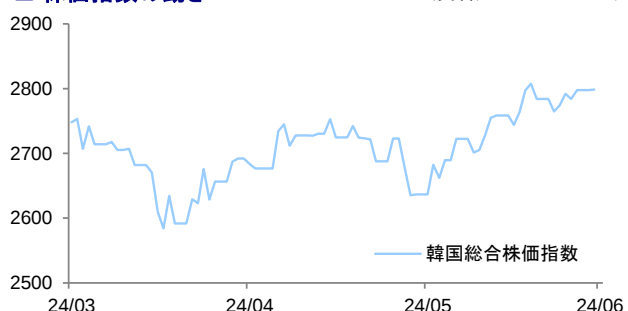
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	貿易収支	5月	4200M	4957M	1500M
6/1	輸出(前年比)	5月	15.3%	11.7%	13.8%
6/1	輸入(前年比)	5月	2.7%	-2.0%	5.4%
6/4	CPI(前年比)	5月	2.8%	2.7%	2.9%
6/5	GDP(前期比)	1Q	1.3%	1.3%	1.3%
6/12	失業率	5月	2.8%	2.8%	2.8%
6/21	PPI(前年比)	5月	-	2.3%	1.8%
6/25	消費者信頼感	6月	-	100.9	98.4
6/28	鉱工業生産(前年比)	5月	3.0%	-	6.1%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.00 ~ 33.00
TWD/JPY 4.75 ~ 5.00

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

6月のドル/台湾ドルは上昇した。

月初の6月3日は32.400でオープン。5月末に発表された米4月PCEや、6日に発表された米5月ADP雇用統計が市場予想を下回る軟調な結果となっていたことを受けて、米金利が急速に低下する中、ドル売りが優勢な展開となり一時32.245まで下落した。

月央になると、7日海外時間に発表された米5月雇用統計において非農業部門雇用者数並びに平均賃金が市場予想を上回る伸びとなっていたことを受けて、ドルが買い戻され32.40近辺まで上昇した。その後は、台湾株が史上最高値の更新を続ける中、外国人投資家からの投資資金流入が見られていた他、米5月CPIが軟調な結果となっていたことを受けてドル買いが一段。12日海外時間に実施されたFOMCにおいては年内利下げ見通しが3回から1回に修正され、13日に実施された台湾中銀においては預金準備率引き上げが実施される等、金融政策においても動きが見られたが、ドル/台湾ドルは売り買い交錯となり32.30台での揉み合いの推移となった。

月後半に入ると、台湾株が高値警戒感から下落に転じる中、外国人投資家による台湾株売りが見られ、32.40台まで上昇。その後、27日海外時間に米大統領選討論会を控え、対中強硬姿勢が示されることへの警戒感から人民元売りが加速したことを受けて、アジア通貨売り圧力が高まる展開に。月末にかけて台湾ドル売りが一段と進み、32.50台半ばまで上昇し底堅く推移した。

■ 今月の見通し

7月のドル/台湾ドルは揉み合いの推移を見込む。

6月は米インフレ指標が軟調な結果となりつつも、米雇用指標は堅調な結果となり、強弱入り混じる形に。また、FOMCにおいては米年内利下げ見通しが引き上げられつつも、台湾中銀においても預金準備率が引き上げられるなど、金融政策においても大きな乖離は生まれなかった。そんな中、月央までは32.40を目前に揉み合いの推移となっていたが、月末にかけては人民元安に端を発するアジア通貨売り圧力や、海外投資資金送金が見られたことを受けて台湾ドル売り圧力が強まり、ドル/台湾ドルは上昇する展開となった。

7月のドル/台湾ドルについては、揉み合いの推移を見込む。米国においてはFOMC会合が予定されているが、月末日の海外時間に開催される他、台湾においては金融政策決定会合は予定されていない。その為、金融政策の観点で大きく相場が動くことは期待されづらい。台湾ドルの資金需給については、半導体サイクルの回復に伴い台湾の輸出回復が期待されるものの、台湾から海外への投資資金送金が相応に見られる中、売り買い交錯となる展開が想定される。その為、ドル/台湾ドルについては方向感に欠ける揉み合いの推移となるであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

当地で人気の朝食は「鹹豆漿」、「油條」、「飯糰」です。

「鹹豆漿」とは、直訳するとしょっぱい豆乳、という意味になる豆乳スープのことです。白い豆乳スープに、ラー油、お酢、ネギ、エビ等の具材が入ったものになっています。台湾では定番の朝ごはんとして、大変有名なものになっています。

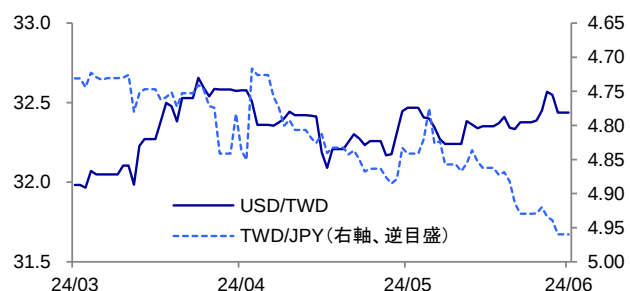
「油條」は、台湾式揚げパンのことです。そのまま単体で食べることもできますし、お粥や鹹豆漿、おにぎりと一緒に食べることも有ります。単体で食べると味に飽きてしまうので、何かと一緒に食べて入っていることが多いものになっています。

「飯糰」は、台湾式おにぎりのことです。台湾式おにぎりではお米では無くもち米が使われており、細長い物や真ん丸の物等様々な形で出てきます。中身には煮卵、油條、たくあんに加え、お肉等が入っています。かなり具沢山、かつもち米ということで結構おなかをたまるものになっています。

是非台湾にお越しの際は、朝ごはんから楽しんで下さい。

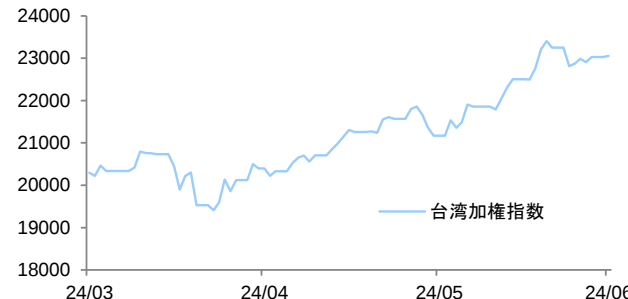
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/5	外貨準備高	5月	-	572.80B	567.01B
6/6	CPI (前年比)	5月	2.20%	2.24%	1.95%
6/7	輸出 (前年比)	5月	9.50%	3.50%	4.30%
6/7	輸入 (前年比)	5月	6.00%	0.60%	6.60%
6/7	貿易収支	5月	6.75B	6.05B	6.46B
6/13	公定歩合	2Q	2.00%	2.00%	2.00%
6/20	輸出受注 (前年比)	5月	6.00%	7.00%	10.80%
6/24	失業率	5月	-	3.35%	3.39%
6/24	鉱工業生産 (前年比)	5月	-	16.06%	14.61%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7900 ~ 7.8250
HKD/JPY 20.20 ~ 20.80

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【6月の香港ドル直物相場】

香港ドルの直物相場は配当金の支払い等の季節的な要因による香港ドル需要の押上を背景に7.82台から7.80台へと推移していった。また、AHプレミアム指数(中国本土と香港株式市場に重複上場している企業の株価差)は先月比香港株が本土対比割安であった事、ハンセン株式指数が18,000台付近で底堅く推移している事でストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による資金流入も活況となり香港ドルを下支えた。米国ではFRB(連邦準備制度理事会)が米国経済指標の高止まりを背景に利下げペースの予測を後退させたことに伴い、日次のリターンが2bp程度に剥落し、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードも減少した。一方で、香港内でのIPO活動は回復傾向にあるものの、直近数年と比較するとまだ静かであった事や、1年物のフォワード取引が7.76を下回った際には実需のドル買いが事業法人によって継続的に発生したことが香港ドル直物相場の重しとなった。また、香港ドル高が越境消費活動を増加させている事やインバウンドの回復を妨げている事で香港域内の小売売上高は減少した。

【6月の香港ドル金利市場】

短期の香港ドルHIBORカーブは四半期末の季節要因と配当の支払いに伴い1か月物が4.6%、3か月物が4.8%付近までとそれぞれ10bp程上昇した。しかし、香港ドル資金の調達が早期から行われていた事もあり、例年と比較すると影響は軽微にとどまった。また、FRBによる利下げが7月には行われないという見通しから香港ドル短期金利の下支えとなり、1か月物と3か月物も準イーロードで推移した。HKMAによる香港ドル買い為替介入は起こらなかったことから、アグリゲートバランスが引き続き450億香港ドル近辺にて低位推移していることも香港ドル短期金利を下支えている。一方で、中期の香港ドルスワップ金利は低下。米国のCPI(消費者物価指数)データの低迷を受けてFRBによる利下げ観測が高まった。それに伴い、香港ドルスワップ金利のキャリートレード(3年固定金利払い、3か月物香港ドル HIBOR受け)+50bpから+80bpまで更に拡大した。

■ 今月の見通し

【7月の香港ドル直物相場】

FRBによる利下げ期待が高まる中、香港ドル直物相場は取引バンド内の香港ドル安の下限である7.85に到達する可能性は低いと考えている。むしろ8月末まで続く配当シーズンが終わるまで香港ドルは上昇すると考えている。また、中国本土での投資先が現状限られている中、ストックコネクトによる香港域内への資金流入も香港ドルを支えるだろう。7月に開催される第三次全体会議で議論されるであろう景気刺激策や改革に対する楽観的な見方により、中国国外への資金流出も限定的となると見込んでいる。更に中国当局による規制緩和や中東諸国との関係改善は2024年後半の香港でのIPO活動に拍車をかけ、香港ドル直物相場の安定に寄与するだろう。

【7月の香港ドル金利市場】

7月に入ると四半期末の季節要因が薄れ、短期の香港ドル金利は低下する事が見込まれるものの低下幅は限定的となるだろう。しかし、香港ドルが米ドルとペッグ制を組んでいる以上FRBが利下げのタイミングを示すまで香港ドル金利も大幅に低下する事は無いだろう。IPO活動の増加や香港への資金流入はむしろ香港ドル金利の上昇の材料となる。とはいえ、低迷を続ける不動産市場やビジネスに対しての先行き不安から資金需要も旺盛では無いため、香港ドル金利は米ドル金利の水準を下回って推移し続けるだろう。

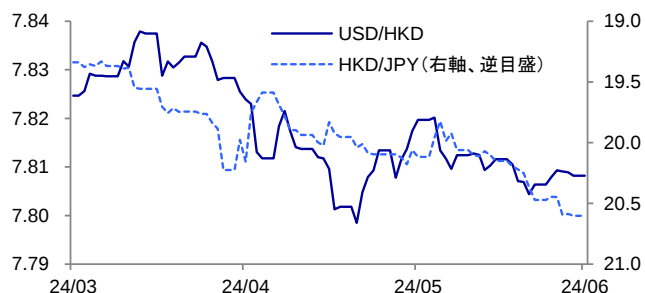
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

香港の朝食は忙しいライフスタイルを反映した魅力的な料理が揃っています。多忙を極める平日は多くの人々がテイクアウトを愛好します。伝統的なものとしてはパイナップルパンなどが根強い人気を誇っていましたが、高いカロリーなどが懸念されて昨今はより健康的な腸粉やシューマイやなどの消費が増加しています。時間に余裕がある場合は中国茶と一緒に点心を楽しむため中華レストランに訪れるのが一般的です。この中国茶と点心の組み合わせはランチにも適しています。西洋風の朝食を求める場合カフェに行くという手がありますが、基本的には価格が高めに設定されています。手頃な対案としては香港版の西洋風朝食があり、ハム、トースト、スクランブルエッグという組み合わせが茶餐廳という香港スタイルの喫茶店で嗜むことができます。

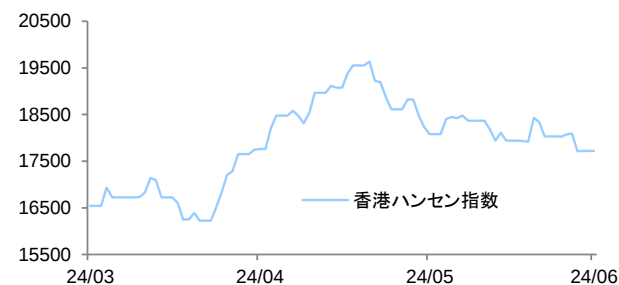
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/31	小売売上高(価額,前年比)	4月	-6.3%	-14.7%	-7.0%
6/5	S&P Global Hong Kong PMI	5月	-	49.2	50.6
6/5	外貨準備高	5月	-	\$417.2b	\$416.4b
6/20	失業率(季調済)	5月	3.0%	3.0%	3.0%
6/21	CPIコンボジット(前年比)	5月	1.3%	1.2%	1.1%
6/25	輸出(前年比)	5月	14.8%	14.8%	11.9%
6/25	輸入(前年比)	5月	8.5%	9.6%	3.7%
6/25	貿易収支(HKD)	5月	-8.7b	-12.1b	-10.2b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.2000	～	7.3000
	CNY/JPY	21.23	～	22.94
	100JPY/CNY	4.3600	～	4.7100

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

6月のドル人民元(オンショアUSDCNY)は底堅く推移した。

ドル人民元(USDCNY)は3日、7.24近辺でオープン。米国では、5月ISM製造業景気指数やADP雇用統計など経済指標の下振れが目立ち、米金利が水準を切り下げた中でドル売り優勢地合いとなつて4日には7.23台後半にまで値を下げる場面も見られたものの、実需に絡んだUSD買いフローも入る中で底堅さを維持。

端午節を挟み11日は7.25近辺でオープン。12日に公表された米5月CPIが事前予想を下回るとドル売りが強まり一時7.23台後半まで下落。しかし、その後のFOMCで示された政策金利及び経済見通しが市場予想比タカ派であったことから、翌13日には7.25台へ戻す展開となった。

17日は7.25台前半で開始。17日の中国5月主要経済指標において一部指標が予想を下回ったことや20日のLPR据え置き発表を受けて底堅い展開となる中、20日にはPBOC基準値が昨年11月下旬以来となるドル高水準に設定されると7.26台まで上昇し年初来高値を更新した。

最終週24日もPBOC基準値が元安方向へ小幅にシフト。元売り圧力が根強い中で日中レンジ上限(2%)に沿う形で水準を切り上げつつ、27日の本欄執筆時点では7.26台後半で推移している。

■ 今月の見通し

USDCNYは底堅い推移を予想。

6月26日には中国10年国債利回りが2002年以来の低水準まで低下するなど、景気先行きに対して市場は依然として悲観的な見方が優勢な状況となっている。中国当局は不動産セクターを中心に政策面からの支援策を講じているものの、経済データにはまだその効果を確認するには至っていない。7月15-18日の日程で第20期中央委員会第3回全体会議(三中全会)が予定されており、経済政策に関する方針等についても定められると考えられるが、足元の相場地合いを変えるほどのインパクトを持つ内容が発表されるとは考えにくい。“穏健な”金融政策の方針は今後も継続することが見込まれ、人民元金利にも低下圧力がかかりやすい状況が継続することが想定される。中国における内需の弱さに加え、西側諸国の対中関税政策等の動きも証券投資や直接投資フローにも影響を与えることが想定され、人民元を買う材料が見つけない状況にある。

米国サイドではようやく物価に軟化の兆候が確認され始めてはいるものの、利下げに踏み切るかどうか判断するには今後の指標次第といった様相。現時点では年後半での利下げ開始が想定されており、その確度が高まってくる状況となれば相応のドル安圧力がUSDCNYを押し下げる要因になる可能性はあるが、もうしばらくは経済データを確認し、FEDのスタンスを確認する時間帯が続くとみる。

6月下旬にかけては人民元安圧力が強まる中で、PBOC基準値の水準がじりじりと切りあがっており、日中レンジ2%の上限ラインを追う形で実勢レートが推移している。急速に人民元安が進むリスクは些少とみるが、USDCNYについては引き続き日中レンジ上限付近での底堅い推移をメインシナリオとした。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

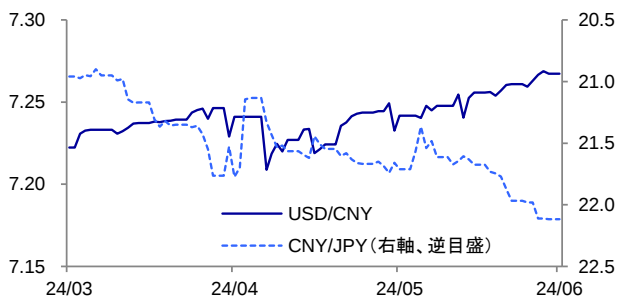
中国はとて広い国ですから、地域によって文化・慣習が大きく異なり、食べ物も例外ではありません。上海オフィスにおいて、よく見る光景をもとに考えてみたいと思います。

中国旅行のガイドブックとかを見ると、朝食で油条(揚げパン)、煎饼(中華版クレープ)とかが有名です。確かに街中にはそういう店も見かけますが、上海のような大都市において、特に若者たちがあまりそのようなものを食べている印象は有りません。肉包(肉まん)やゆで卵のほうがよく見かけます。ただ、他の都市に出張に行くと、朝の通勤時間には人通りが多いところに屋台的な感じで油条や煎饼を買うために並ぶ人たちを見かけるので、まだまだ健在とも言えるでしょう。

私自身は正直ローカル朝食を食べることはほとんどなく、コーヒー、パン、ヨーグルトという感じです。たまにおにぎりが食べたくることがあるのですが、残念ながら中国のコンビニで売っているおにぎりは日本のそれとは似て非なるもの。お米、味付け、具材、どれをとってもなかなか満足できるものに出会えたことはありません。海外駐在があるあるだと思いますが、日本に一時帰国すると何故か一度はコンビニのおにぎりを食べたくなり、そしてその美味しさを再認識しますね。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	財新製造業PMI	5月	51.6	51.7	51.4
6/5	財新非製造業PMI	5月	52.5	54.0	52.5
6/7	貿易収支	5月	\$72.15b	\$82.62b	\$72.24b
6/12	PPI(前年比)	5月	-1.5%	-1.4%	-2.5%
6/12	CPI(前年比)	5月	0.4%	0.3%	0.3%
6/17	MLF1年物	-	2.50%	2.50%	2.50%
6/17	鉱工業生産(年初来/前年比)	5月	6.3%	6.2%	6.3%
6/17	小売売上高(年初来/前年比)	5月	3.9%	4.1%	4.1%
6/17	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	5月	4.2%	4.0%	4.2%
6/20	LPR1年物	-	3.45%	3.45%	3.45%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3300 ~ 1.3800
SGD/JPY 114.00 ~ 122.00

アジア・オセアニア資金部 松本 彩花

■ 先月の為替相場

先月はSGD安が進行。月初USD/SGDは1.35台前半でオープンすると、3日発表の米5月ISM製造業景気指数等、月初週発表の一連の米経済指標が弱含んだことを背景にドル売りが優勢となり、USD/SGDは米雇用統計を控える中で1.34台半ばまで下落した。7日、米5月雇用統計が市場予想を上回ったことでドル買いの流れとなり、USD/SGDは1.34台前半から1.35台前半まで急伸する展開に。

週明け10日、週内にFOMCや米5月CPIの発表を控えていることから、1.35台前半での小幅な値動きに。11日にはフランス政治の不透明感を背景としたリスク回避の動きからドル売りが強まる場面も見られたがUSD/SGDへの影響は限定的。12日、米5月CPIにてインフレ鈍化が確認されると米金利が低下し、USD/SGDも一時1.34台前半まで急落したが、その後のFOMCにて6月公表ドットチャートの利下げ回数が年内1回に下方修正されるとUSD/SGDは1.34台後半まで水準を戻した。週末にかけてはFOMC後のドル高の流れを引き継ぎ、緩やかに相場を切り上げる展開となり、14日には節目である1.35を回復。

17日、シンガポール休場につきUSD/SGDは薄商い。その後も前週にFOMCや米インフレ指標発表等の注目イベントを消化していることや、19日が米国休場であったこともあり大きな動きは手控えられた。20日、スイス中銀の利下げを受け欧州通貨売りドル買いの展開。ドル買いの流れがアジア通貨にも波及し、USD/SGDも1.35台半ばまで上昇。

24日、シンガポールの5月総合CPIは前年比+3.1%と前回対比加速となったことを受けてかUSD/SGDは1.35台前半まで下落。月末にかけては相場の方向感乏しく、新規材料待ちの状況に。USD/SGDは1.35台半ば付近での小幅な値動きとなった。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場はもみ合い推移を予想。

先月、米経済指標については軟調な結果が目立ったが、6月FOMCにおいて公表されたドットチャートにて年内利下げ回数が1回に下方修正されたことや欧州政治不安等によるドル買いの流れがアジア通貨にも波及したこともあり、ドルが底堅い値動きとなった。今月もFOMCが予定されているが、米5月CPIは前年比+3.3%と前回対比インフレ鈍化が確認できている状況ではありつつも、依然としてFRBの物価目標2%を上回っている。労働市場も底堅く推移する中で、7月会合にて利下げに動く可能性は低いとの見方が強い。また、足元のFRB高官発言においても利下げに対して慎重な基本スタンスは従前と変わっていないため、ドルが崩れることは想定されづらいと考える。

シンガポールにおいても今月MAS会合が予定されている。シンガポールの5月総合CPIは前年比+3.1%、コアCPIも前年比+3.1%となり、インフレの根強さが示された。MASと貿易産業省は共同声明にて「コアCPIは低下基調が続き今年の第4四半期にはより顕著に低下するだろう」との見通しを示したものの、食品・エネルギー価格については上昇圧力に対する懸念を指摘しており、インフレ再燃リスクには注視が必要。但し、MASからは「現在の金融政策設定は中期的な物価安定を確保するのに十分」との情報発信がされていることもあり、現行の金融政策を維持する可能性が高いと考える。USD/SGD相場においては上述の通りドル安方向へ強い流れを作るような材料は足元特段見当たらないが、強弱入り混じる米経済指標等を背景に一進一退の値動きとなると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

シンガポールは外食文化が根強く、ホーカーセンター(屋台がたくさん集まったスポット)やカフェで朝食を食べたり、買ってきたものを家や会社で食べる人が多い印象です。故に、朝早くから開いているお店が多く、場所によってはオフィスに向かう人たちが混み合う様子も良く見かけます。

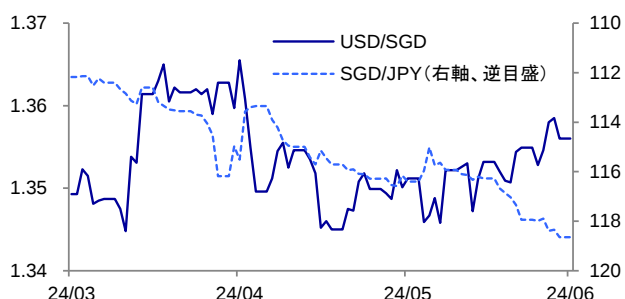
シンガポールの定番朝ご飯としてまず最初に思い浮かぶのは「カヤトーストと温泉卵」。カヤトーストとはココナツミルクと卵、砂糖にパンダンリーフを煮詰めたカヤジャムを挟んだトーストのことで、このトーストと一緒に温泉卵や「コーヒー(Kopi)」「紅茶(Teh)」をオーダーするのが定番です。また、オフィスを見渡すと朝食にビーフンを食べているスタッフが多い印象で、ビーフンもシンガポールで人気の朝ごはんの一つかと思います。

東南アジアあるあるではありますが、シンガポールのコーヒーや紅茶は何も言わないと信じられない程甘い出来栄えで出てくることがあるため、甘い飲み物が苦手な方は事前に甘さ控え目の旨メンションされることをおすすめします。

(アジア・オセアニア資金部 松本 彩花)

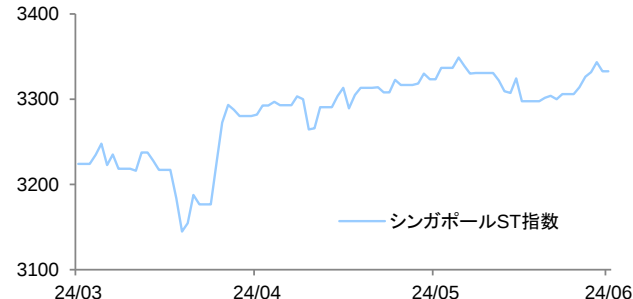
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/5	小売売上高(前年比)	4月	1.9%	-1.2%	2.7%
6/18	非石油輸出(前年比)	5月	-1.1%	-0.1%	-9.3%
6/24	CPI(前年比)	5月	3.1%	3.1%	2.7%
6/26	鉱工業生産(前年比)	5月	1.4%	2.9%	-1.6%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 36.00 ~ 37.30
THB/JPY 4.20 ~ 4.40

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 純太

■ 先月の為替相場

6月のドルバーツは方向感に欠ける推移。
月初、タイ祝日となる中、36バーツ台後半で取引を開始。序盤は米経済指標の軟調な結果や、米金利の低下を受けて上値の重い展開に。米国経済指標については3日に発表された5月ISM製造業景況指数、4日の4月JOLTS(求人件数)、5日の5月ADP雇用統計等、主要指標が軒並み弱い結果となったことに加えて、米金利は5日にカナダ中銀が利下げを行ったことが低下に拍車をかける格好となり、ドルバーツは一時36バーツ台前半まで下落。ただ、7日に発表された米5月雇用統計が失業率こそ上昇したものの、非農業部門雇用者数、賃金ともに市場予想を上回る結果となり、米金利が急上昇。ドル全面高となる中でドルバーツも反転。36バーツ台後半まで急騰した。
中旬、12日にタイ中銀(BOT)による金融政策委員会(MPC)が開催され、市場予想通り政策金利据え置きが決定されるも、金利据え置きについて、直近2会合では2人が反対を示していたところ、今回は1人の反対票に留まっていたこともあってか、ややバーツ高で反応。その後、同日海外時間に発表された米5月CPIはヘッドライン・コアともに市場予想を下回り、ドル売りが優勢となると、ドルバーツも一時36バーツ台半ば付近まで下落。ただ、その後公表されたFOMCの結果において、ドットチャートにおける今年の利下げ回数の予測中央値が、前回の3回から1回に修正されていたこと等を受けてドルが急速に買い戻され、結局CPI発表前の水準に戻るといった荒い値動きに。以降は米経済指標の結果に上下する場面が見られるも、しばらく同水準での推移が継続。
下旬、36バーツ台半ばから後半にかけての推移が続いていたドルバーツは、25日、26日にそれぞれ発表されたカナダ5月CPI、オーストラリア5月CPIがいずれも市場予想を上回ったことでインフレ高止まりの懸念が米国にも波及したこともあり、ドルが全般的に上昇する中、一時37バーツ手前まで上昇。28日に米5月PCE価格指数の発表を控えていることもあってか、37バーツを上抜ける勢いは見られなかったものの、本欄執筆時点(27日20時時点)において36バーツ台後半の水準を維持しながらの推移を見せている。

■ 今月の見通し

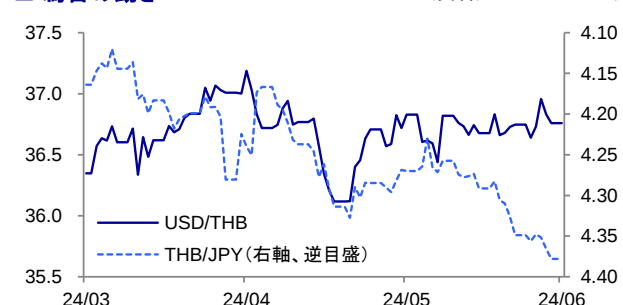
7月のドルバーツ相場は高値圏を維持する値動きを想定。
5月初旬に37バーツ台前半と、昨年の高値を更新する動きを見せたドルバーツは、その後反落し、同月半ばにおよそ2カ月ぶりの安値を付けた。ただ、結局同月末にかけて急速に値を戻しており、足もとは36バーツ半ばから後半付近にかけての高値圏での推移となっている。かかる中、今後のドルバーツ相場を窺う上で、米国・タイの金融政策の動向を踏まえれば、足もとと同水準での推移が継続するものと考ええる。
米国の金融政策については、6月11日から12日にかけてFOMCが開催され、ドットチャートにおける今年の金利予測中央値が修正される等が確認されたものの、結局マーケットの利下げ織り込みに大きな変化は見られていない。次回のFOMCは7月末に予定されており、それまでに発表される経済指標の結果に一喜一憂し、相場もそれに振らされる場面が見られるだろうが、直近のFed高官の発言では、経済指標等のデータを判断するには相応の時間を要するとの内容のものが多く見られており、結局は現在のドルの水準が大きく変わることは考え難いものと見ている。
タイに目を移せば、6月12日に開催されたタイ中銀(BOT)による金融政策委員会(MPC)において、「先行きは外需と製造業を巡る不確実性や景気刺激策の動向を注視する必要がある」としながらも、現行の金融政策が「長期的なマクロ金融、及び景気と物価の安定と整合的」と判断した上で政策金利据え置いている。同国の金融政策を巡っては、年初から利下げ要求を続ける政府とBOTの対立が目立っているが、直近でも現行のインフレターゲット(1-3%)の引き上げを提案する政府に対し、BOTが反論する等、BOTがスタンスを変更する兆候は引き続き見当たらない。
以上を勘案し、しばらくはドルバーツ相場が足もとから大きく水準を変更することは想定していない。ただ、タイの政治を巡って、7月3日に前進党解党の是非が同国憲法裁判所で審議される予定となっており、加えてセーター首相の違憲疑惑に係る審議も7月10日に予定されている。もはや日常茶飯事となったタイ政治の混迷であるが、一応バーツ安のリスク要因として見ておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』
当地において、朝食を家で食べるという人は少数派である。通勤途中に屋台やコンビニ等で調達してオフィスで食べるという人々が多く、試しに当室メンバーの朝の出勤の様子を観察してみたが、多くのスタッフが手に食物を携えていることが確認できた。
さて、そんな当地の朝食事情であるが、当地を代表する朝食メニューとして、「カオトム」、「ジョーク」をご紹介したい。いずれも日本でいうところのお粥であるが、「ジョーク」はお米の原型がなくなるほどトロトロに煮込まれたもので、日本人がイメージするお粥に近いのは「カオトム」となっている。いずれもタイの朝ごはんとして人気は非常に高く、日本人の口にも合う味付けとなっていることが多い。値段も手頃であり、屋台、コンビニ、はたまたゴルフ場のレストラン等、様々な場所で見かけることができる超定番メニューである。日本のお粥と同様、お腹に優しく、比較的低カロリーとなっており、筆者も体調を崩した際に何度もお世話になっている。刺激強めで、やや油が気になるメニューが多いタイ料理の中には非常にありがたい存在と言えよう。当地を旅行される際、タイ料理のパンチ力にちょっと疲れたと感じたら、ぜひお試しください。

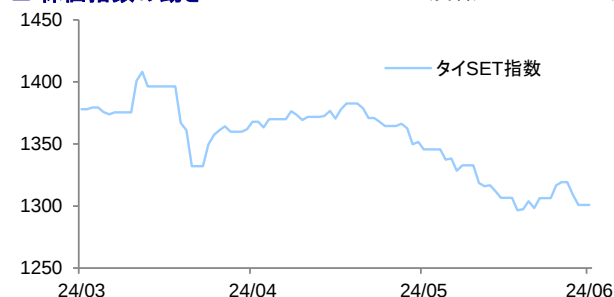
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/7	CPI YoY	5月	1.20%	1.54%	0.19%
6/7	CPIコアYoY	5月	0.39%	0.39%	0.37%
6/12	タイ中銀政策金利	-	2.50%	2.50%	2.50%
6/13	消費者信頼感指数	5月	-	54.3	56.0
6/21	輸出(通関ベース)YoY	5月	2.00%	7.20%	6.80%
6/21	輸入(通関ベース)YoY	5月	-0.15%	-1.70%	8.30%
6/21	貿易収支(通関ベース)	5月	-\$965M	\$656M	-\$1,642M
6/25	自動車販売台数	5月	-	49,871	46,738

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.65	～	4.75
	MYR/JPY	32.90	～	34.20
	JPY/MYR	2.92	～	3.04

マレーシアみずほ銀行 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

6月のリングgit相場は主要中銀のイベントを複数こなしながらも、大きな方向感が出ることなく、レンジ推移となった。

連休明けの4日、前日夜間に発表された米経済指標が予想に届かず、5月末比ドル安水準となる4.68台で取引を開始。徐々にドルが買い戻される展開となったが、JOLT求人件数やADP雇用統計も予想に届かなかったため、再びじりじりと低下。6日のECB政策理事会では政策金利が引き下げられるも、予想通りのため影響は軽微。米5月雇用統計がヘッドラインを含めて総じて強い結果となると、週明け10日には4.72近辺まで急騰した。

中旬、米5月雇用統計の影響が尾を引く恰好で底堅い動きを見せていたが、12日に発表された米5月CPIは一転して弱い結果となった。FOMCではドットチャートこそ年内の利下げ予想が1回に下方修正されたが、パウエルFRB議長の会見はそれを補うようにバランスが取られていたことから、影響は限定的。米CPIによる米金利低下の影響で一時4.70割れとなるも、スイス中銀が2度目の利下げに踏み切ったことで欧州通貨に対するドル買いがドルリングgitにも波及。4.71台を中心に推移した。

下旬、マレーシア5月CPIは前年同月比+2.0%と3カ月ぶりに加速することとなったが、相場への影響は限定的だった。27日の米市場クローズ後に予定されているバイデン氏とトランプ氏の討論や28日の米5月PCEに注目が集まる中で、エマージング通貨に資金をシフトする流れが見られ、月末集の前半には4.70近辺まで下落したが、週半ば以降はイベント待ちの様相を呈し、4.70台前半でレンジ推移となっている。

■ 今月の見通し

7月のリングgit相場は引き続き米の利下げ開始時期に対する思惑が影響する他、マレーシア中銀のMPCでの現状維持を予想して、上値の重い展開がメインシナリオと考える。

6月は米雇用統計が予想以上に強く、波乱を招いたものの、その後中旬に発表された米CPIを見ると、米インフレ面でのこれまでの金融政策の進展があったと思わせる結果だった。ただし、FRBメンバーからは短期的な動きに注目するのではなく、短くても1四半期、長ければ年単位での安定した基調を確認して初めてインフレ率がターゲットとする2%に戻ると考えているとのコメントが続いている。こうした発言は過度に市場がFRBに挑戦することを牽制するものであり、ドットチャート上では年1回が利下げ予想回数の中央値であるものの、利下げを2回と見ている参加者が最も多かったことには留意すべきだと考えられるため、ドル高を抑える要因になると思われる。

また、マレーシア国内に目を向けると、以前懸念されていたリングgit安について、各種指標からマレーシア経済の上向き感が意識される中で通貨安懸念が後退している印象を受ける。直近発表されているマレーシアの5月CPIについても安定している数値であるため、通貨安圧力が働きにくいと思われる。

以上より、引き続きデータ次第という状況に変わりがなく、良好な米経済指標が続くと米金利の高止まり感と相対的なドル高が生じ易いことになるものの、ドルリングgitが一時期懸念されていた4.80に向かって上昇するシナリオよりは、上値の重さが意識される方が可能性が高いと思われるため、4.70近辺での上値重い推移を予想している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

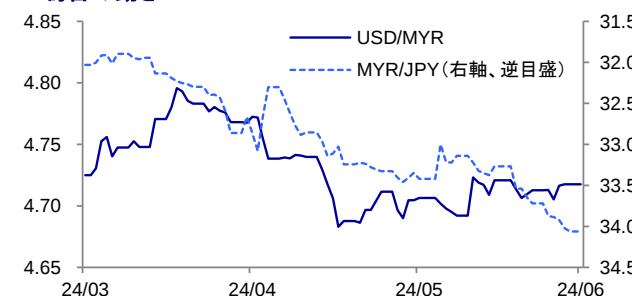
『当地の朝食事情』

当地の朝食といえば、ハラール食だとやはりナシレマを紹介したい。ココナツミルクで炊いたご飯にゆで卵やキュウリと一緒にピリ辛のサンバルソースをかけて食べる。バナナの葉で三角形に包まれており、出勤前に路上の屋台で購入して、仕事前にオフィスで朝食を取る人も珍しくない。マレーシア赴任後最初に食べた時は、朝食からのピリ辛ソースに少し戸惑ったが、今となっては、ナシレマにあのピリ辛サンバルソースは欠かせないと感じている。バナナの葉に包まれた三角形ののを見ると、軽い朝食に見えるが、実際食べてみると、結構ボリュームあり、しっかりとお腹を満たしてくれる。更に、100数十円で買えるお財布にも優しい朝食なのだ。KL中心部でも朝の屋台で手軽に買えるので、マレーシアにお越しの際は是非お試し頂きたい。

次にノンハラール朝食を一つ紹介させて頂きたい。それは点心だ。中華系マレー人を中心に人気が高く。人気店になるとお店も早朝から行列ができることもある。マレーシアに来るまでは朝食に点心のイメージはなかったが、今ではすっかり定着している。蒸したのエビシユマイや小籠包を中国茶と一緒に食べるのが一押し。我が家でも週末に朝食として点心を食べに行くことがあるが、遅めのランチ扱いではなくてガチンコ朝食なのだ。日の出前の薄暗い時間には家を出発しないと、行列で店に入れないのだ。空腹の朝から行列待ちを回避しようとする、出発は6時台がベスト。朝食後は近くの公園に寄って一汗流して帰るのもおすすめコースだ。(内田)

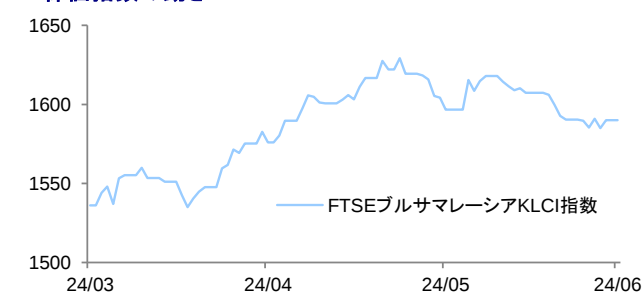
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/10	Industrial Production YoY	Apr	6.5%	6.1%	2.4%
6/10	Foreign Reserves	May-31	-	\$113.6b	\$113.3b
6/20	Exports YoY	May	2.3%	7.3%	9.1%
6/20	Imports YoY	May	8.4%	13.8%	15.6%
6/20	Trade Balance MYR	May	10.15b	10.10b	7.70b
6/24	Foreign Reserves	Jun-14	-	\$114.1b	\$113.6b
6/25	CPI YoY	May	1.9%	2.0%	1.8%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	16000	～	16500
IDR/JPY	0.9615	～	1.0000
JPY/IDR	100.00	～	104.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

6月のルピアは下落。

月初3日、ドルルピアは16200台前半で取引を開始。この日発表されたインドネシア5月消費者物価指数(CPI)の結果は、前年同月比+2.84%となり事前の市場予想を小幅に下回ったが、コアCPIは同+1.93%と市場予想を上回り強弱まちまちの内容。為替市場への影響は限定的となった。4日インドネシア中銀のペリー総裁が議会証言において「ドルルピアは2024年に15700～16100で推移し2025年には15300～15700までルピア高が進展する」との見通しを示したが、ドルルピアは動意薄く16200台前半での取引が継続した。5日には16200台後半まで小幅にルピア安が進展したが、直近安値圏となる同水準では上値を押さえられ16200台半ばから後半にかけてのレンジでの取引が継続。7日海外時間に発表された米5月雇用統計の結果が堅調な内容となるとドル買いの流れが強まり、週明けとなる10日のルピアは16200台後半までドル高が進展した。13日、前日海外時間に発表された米5月CPIの軟調な結果を受け下押しする局面も見られるもすぐに反発。14日、インドネシア中銀がインフレ抑制と通貨安定を目的に為替介入したことを発表するもルピア安の流れは変わらず16300を上抜けるとルピアは下落幅を拡大させ16400台を付けた。

連休明けとなる19日、ドルルピアは16300台後半で取引を開始すると、先週大きく売られた動きへの反発もあってカルピアが買い戻される展開となり16300台前半まで下落幅を縮小させた。20日、インドネシア中銀が金融政策決定会合において主要政策金利の据え置きを決定。大方の予想通りの結果となった一方で、一部でルピアが直近安値を更新したことから、利上げを行うと予想していた向きもあり、ルピア安の流れが再燃し16400台前半を付けた。翌21日もルピア安の流れが継続し、ルピアの月中安値となる16400台後半をつけたが翌週24日には16400近辺まで値を戻した。月末にかけては16400近辺での値動きが継続しクローズした。

■ 今月の見通し

7月のルピアは底堅い値動きを予想。

6月の中銀会合において、インドネシア中銀はルピア安が進展する中においても政策金利の据え置きを決定した。4月の中銀会合では、ルピア安への対応として追加利上げを決定していたが、6月にかけての3か月間で2回の据え置きは国内経済への影響に鑑み、利上げを避けたものと考えられる。また、6月は季節性として海外への配当支払い等が増え通貨安が進みやすい環境であったこともルピア安が進展した背景の一つとも考えられ、一過性の要因によるものとして政策金利引き上げによる対応を避けたとも考えられる。政策金利を据え置いた一方、中銀は引き続き「通貨の安定を優先する」とのスタンスを維持し、通貨の安定のため「必要に応じて為替市場・DNDF(Domestic Non Deliverable Forward)市場・国債市場における介入を行う」ともコメントしており、過度な通貨安は容認しない姿勢を改めて示した。米国の利下げ期待が後退する中でドル高が進展しやすい環境が引続き継続すると考えられるが、配当等の支払いがピークを過ぎルピア売り圧力が低下すると見込まれることや、中銀が「通貨の安定」を標榜する中で、急激・過度な通貨安は介入によって防衛されることが考えられること等からルピアの下落幅は限定的なものになると予想する。

その反面、需給面では資源価格高騰などの一時的な要因が剥落し経常収支は2023年4～6月期以降赤字へ転落しており、ルピア安が進展しやすい環境が継続している。短期的には通貨安が止められたとしても、中長期的な下落リスクには引き続き注意が必要か。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

米を主食とされる当地は、朝食にご飯を食べることが多い。

朝食定番のご飯料理の一つはナシ・ウドック「Nasi Uduk」。非常に人気があり、当地のほぼどこでも簡単に見つけることができます。

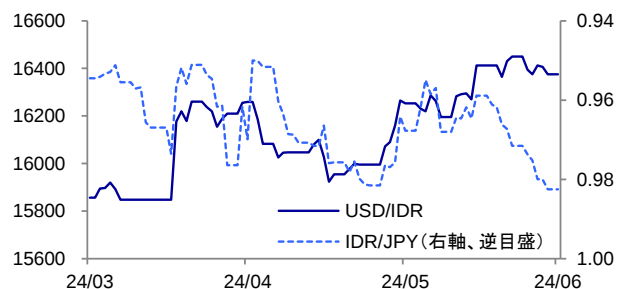
水の代わりにココナッツミルクに浸した米を、香りづけにクローブ、シナモンの樹皮、レモングラスとともに炊いて作られます。香りを高めるために、蒸すときにパンダンの葉の節を米に投げ込むこともあります。ココナッツミルクとスパイスが米に油っぽくて豊かな風味を染み込ませます。パワンゴレン(揚げたエシヤロット)は、盛り付ける前に米の上に振りかけられます。

ナシ・ウドックは通常、色々なトッピングをのせていただきます。シンプルな細切りの鶏肉、キュウリのスライス、細切りの卵焼き、ケリン・テンベ(甘い醤油をかけたカリカリの揚げテンペ)などから、手間をかけたフライドチキン、牛肉煮込みなどあります。また、欠かせないのはサンバルとエビクラッカーをのせて、最高の朝食に。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

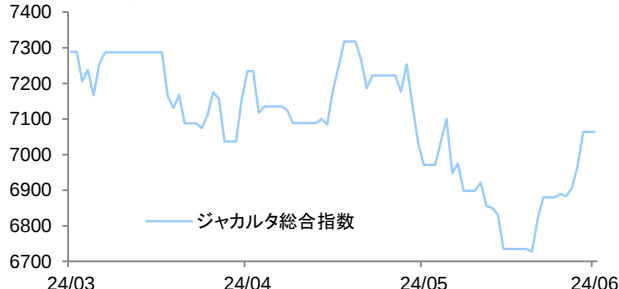
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
6/3	CPI(前年同月比)
6/19	貿易収支(USD M)
6/19	輸出(前年比)
6/19	輸入(前年比)
6/20	BI金利

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
5月	2.97%	2.84%	3.00%
5月	2,959	2,927	2,720
5月	-0.10%	2.86%	10.09%
5月	-9.90%	-8.83%	4.62%
-	6.25%	6.25%	6.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 57.50 ~ 59.50
JPY/PHP 0.360 ~ 0.380

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【6月のドルペソ相場は、年初来のペソ安を更新するが上値は重い】

6月初のドルペソ相場は、1米ドル＝58ペソ台半ば近辺で開始。月初週は、米ドルの上値を追う展開となり、断続的に年初来のドル高ペソ安水準を更新し、58.80ペソまで上昇。その後、米長期金利が約2か月ぶりの水準まで低下する動きや米5月雇用統計を控えたポジション調整もあり、1米ドル＝58ペソ台半ば近辺まで値を戻した。米5月雇用統計の公表後、再びドル買い優勢で反応するものの、上値は重たく、先日付けた58.80ペソに再びタッチするに留まった。

中旬に入ってから、フィリピンの主要経済指標の公表が相次ぐ中、比4月貿易統計では前回比、予想比ともに貿易赤字幅が拡大。しかしながら、上値警戒感も強く、大きくペソ安に振れることはなかった。結局、米5月分の物価指標やFOMC待ちの様相となり、58ペソ台半ば近辺で小動き。

下旬に入るあたりには、FRBメンバーによる政策金利の見通し結果(2024年内の利下げ回数の減少など)を受け、再びドルの上値を追う展開へ。すると58.80近辺まで上昇するものの、一段の上伸とはならず、上値の重たさを感じさせる値動きとなった。終盤は、フィリピン中銀による金融政策決定会合が行われたが、結果は市場参加者の予想通り、政策金利は据置きを決定。1米ドル＝59ペソ手前の水準で6月を終えた。

■ 今月の見通し

【7月のドルペソ相場は、引続き上値を模索する展開と見る】

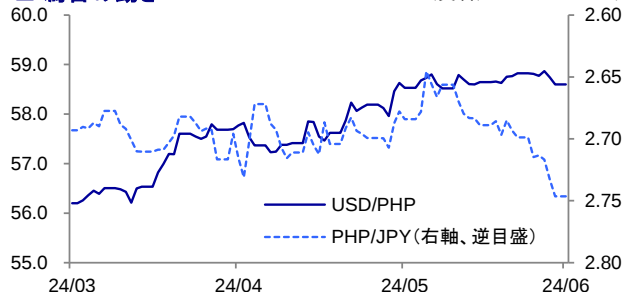
6月も年初来のドル高ペソ安の水準を断続的に更新してきたが、月を通して見れば、58ペソ台半ばから後半までの値動きにとどまり、狭い値幅での推移となった。3月中旬の55ペソ台前半あたり以降から始まるペソ安の流れの中、騰落率としては約6%。毎月、1ペソ前後ほどペソ安に向かっていった事を勘案すると、6月の月間幅が0.5ペソ内外に収まっていることは、穏やかな月であったと言えるだろう。

しかしながら、ペソ買い材料が強まったのかと言うと、そう言う訳ではない。5月中旬に、比中銀が年内▲0.5%程度の利下げを示唆して以降、ペソ安は加速した。6月に入り一部高官からは、▲1.5%の利下げもあり得る、と言う発言が出てきたが、それに対しては、流石に過度な期待を市場参加者に織り込ませないため、後日火消しする発言が見られた。一方、ここまでの所、比中銀は為替相場は市場の値動きに委ねている、と従来からの発言を繰り返すにとどまる。心理的な節目である59ペソは目前に迫り、徐々に上値の重たさが増している。

引き続き、米経済指標の結果と米長期金利動向がドルペソ相場を主導する状況が続くであろう。これに加えて、比中銀の利下げのタイミングも新たな材料として加わってきた。米政策金利の利下げ時期が年終盤と見込む向きが強くなっており、目先はペソ安材料が多い方に軍配が上がりそうだ。一方、比中銀は、ペソ安によるインフレ再燃を警戒していることから、野放しにペソ安を許容することはないだろう。7月上旬の米経済指標の結果次第では、59ペソ台に乗せる可能性もあるが、これまでのペースのようなペソ安は想定しがたい。1米ドル＝58ペソ台後半から59ペソ台を挟むレンジを中心とした値動きがメインシナリオだと予想する。

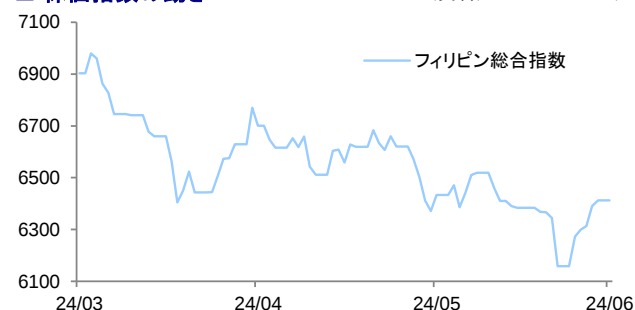
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 83.00 ~ 83.90
INR/JPY 1.85 ~ 1.98

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【6月の米ドル/インドルピーは節目83台半ば水準で高値圏揉み合い】

83ちょうど付近にて当月取引を開始。月初については、米大手格付会社からの見直し引上げ公表（安定的→ポジティブ）、2023年度の年間GDP成長率が+8.2%と市場予想を上回る結果となったことも相俟って、ポジティブ材料が並び、INR高の流れに。節目83水準を割り込む局面では、実需勢のフローおよびインド準備銀行(RBI)からの下支えの為替介入(USD買い・INR売り)も散見され、程なくして水準感を取り戻す。月央から月末にかけては、節目83台半ばを挟んで高値圏での揉み合いに終始し、一時年初来安値を更新する局面も見られたものの、実需勢からの逆サイドのフロー(USD売り・INR買い)から過度なルピー安の展開には至らず、結局、節目83台半ば付近でのクローズとなった(26日時点)。

SENSEXは、月初は76,000水準近傍でスタート後、インド選挙開票日に、モディ単独政権での過半数獲得がなされなかったことで、期待外れ感から急落。一方、開票翌日以降は一転して買い圧力に転じる展開となり、月末にかけて79,000台に突入する等、年初来高値を更新する動きを見せた。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、4月・5月の売り越しから6月に入って買い越しの流れに転じており、資金流入の回帰が再び始まっている状況。

インド経済指標では、5月製造業/サービス業PMIは前回対比で小幅に低下。6月金融政策委員会(MPC)は、8会合連続となる政策金利据え置き(6.50%)を実施。一方、今回投票は4対2と、前回会合時から利下げ票が増える恰好に。4月鉱工業生産は、市場予想を上回る結果(前回数値も、上方修正)。5月消費者物価指数(CPI、前年比)は+4.75%と、前回の+4.83%から低下し、インフレターゲット4.0%台に入って引き続き落ち着いてきている状況。5月貿易収支は、赤字幅が拡大し赤字常態化は継続、通貨として弱い立ち位置は不変。

■ 今月の見通し

【7月の米ドル/インドルピーは緩やかなルピー安レンジシフトか】

7月においては、高値圏での揉み合い推移から、緩やかなルピー安の展開を見込む。6月は、83台半ば水準近傍での値動きが主軸となるも、実需勢のフローが奏功し、上値を押さえる展開。RBIからのアンダーコントロールが継続する前提は崩さず、過度な値動きは抑制される想定なものの、一方、上値抑えの為替介入が従前より若干乏しい印象もあり、目線感としての84水準への緩やかなレンジシフトもいよいよ近づいてくるか。

5月CPIは、前回対比で低下する結果に。6月金融政策委員会(MPC)では、政策金利は6.50%の据え置きとなったものの、前回会合時から利下げ票が増加。政策スタンス(インフレ退治に向けた利上げ路線継続)は不変のままを維持し、引き続きインフレへの警戒態勢は崩していない状況下、インフレターゲットの+4.0%を達成する前提で、年後半にかけての▲25bpの利下げ観測が徐々に高まった様相か。

注目されたインド選挙は、モディ政権圧勝ムードの中での過度な期待感からの反動から、トリプル安(為替・株式・債券)を招く。一方、その後大きくダイレクションの変化とは至っておらず、引き続きインドの成長・中長期的に魅力的な投資環境という立ち位置は、値強い印象。斯かる中、6月のインド株・インド債券への投資資金流入については、買い越しに転じている状況。

米利下げ局面入りにて本年後半にかけてルピー高の流れが顕在化するといったメインシナリオは不変であるが、USD売り圧力の勢いが加速する想定では構えておらず、RBIからの下支えの為替介入および実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)が発動されることで、ルピー安回復という方向感で見守りたい。米インフレ動向次第にて再度の利上げ観測が高まってくる局面では、メインテーマと方向感が大きく変貌する(USD買い圧力の高まり)可能性に警戒しつつ、年後半にかけての米印双方の金融政策動向での局所的にボラタイルな展開に留意しておきたい。

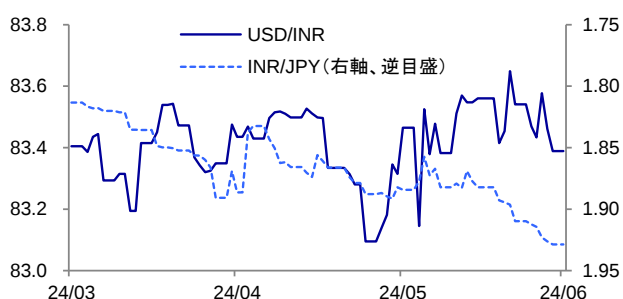
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

インドの朝食は意外にも優しい味である。辛い。北と南で違うのだが、ホテルなど出る朝食はDosa(ドーサ)、Idly(イドリ)、Vada(ヴァダ)等である。ドーサは薄いパリパリの、乗せている皿以上に大きなクレープで、中に辛いカレー味のポテトが少し入っており、それと一緒に食べる。付け合わせ？にこれもあまり辛いカレーがついていて浸して食べる。イドリは、米粉で作ったカルカンみたいな見た目の少しすっぱみのある丸いパンである。これにチャツネをつけて食べる。個人的には一番好きなインドの朝食である。ヴァダは穴の小さなちまっとした揚げドーサツで、スパイスは代わり甘くない。これにやはりチャツネやカレーをつけて食べる。やたらとチャイを飲むイメージもあるが、朝はこれも意外にフルーツジュースがホテルの朝食では人気である。スイカジュースはマストなか手に入れやすさの都合か、必ずあるように思う。ホテルとえばバリエーションに富んだ内容を提供するところもあり、北と南両方の朝食があったり、トースト、シリアル、タイカレーやおかゆを用意していたりする。オムレツをその場で調理してくれることもあり、刻んだ野菜がたくさん入ったちょっぴりスパイシーなマサラオムレツは塩気がいい感じでなかなかおいしい。インドと言えばカレー、というイメージがあるが、朝食は優しい味のものが多く、もしインドのスパイシーな料理が苦手な方は朝食からチャレンジすると良いかもしれない。そして最後は甘いチャイでエネルギーをチャージして、一日を始めましょう。(バンガロール支店 近藤)

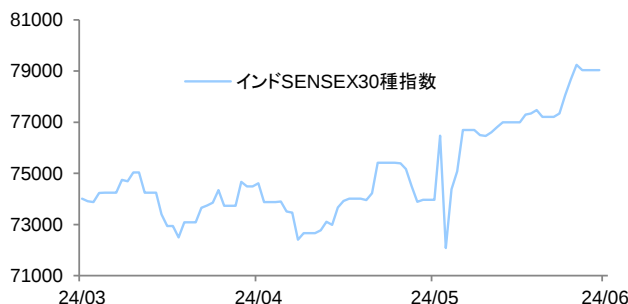
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

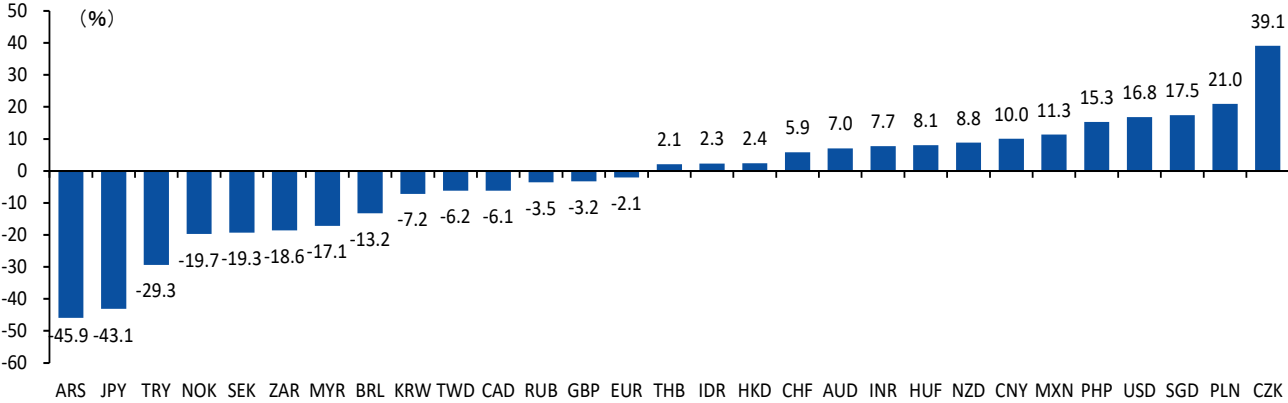
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	製造業PMI	5月	-	57.5	58.8
6/5	サービス業PMI	5月	-	60.2	60.8
6/7	政策金利	6月	6.50%	6.50%	6.50%
6/12	鉱工業生産	4月	4.50%	5.00%	5.40%
6/12	CPI	5月	4.85%	4.75%	4.83%
6/14	貿易収支(百万ドル)	5月	-19,500	-23,782	-19,103

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年6月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年6月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	39118.86	3.8%	-
日本	USD/JPY	141.04	160.88	14.1%	日経平均株価	33464.17	39583.08	18.3%	3.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.0713	-3.0%	ドイツDAX指数	16751.64	18235.45	8.9%	8.9%
英国	GBP/USD	1.2731	1.2645	-0.7%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	8164.12	5.6%	6.3%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.667	-2.1%	S&P/ASX200指数	7590.818	7767.47	2.3%	4.5%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.3679	3.3%	S&PTロント総合指数	20958.44	21875.79	4.4%	1.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.2673	2.4%	上海総合	2974.935	2967.403	-0.3%	-2.5%
香港	USD/HKD	7.8115	7.8082	0.0%	香港ハンセン	17047.39	17718.61	3.9%	4.0%
インド	USD/INR	83.2088	83.3887	0.2%	インドSENSEX30種	72240.26	79032.73	9.4%	9.2%
インドネシア	USD/IDR	15399	16375	6.3%	ジャカルタ総合	7272.797	7063.577	-2.9%	-8.7%
韓国	USD/KRW	1291.07	1376.47	6.6%	韓国総合株価	2655.28	2797.82	5.4%	-1.2%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.7175	2.7%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1590.09	9.3%	6.4%
フィリピン	USD/PHP	55.385	58.601	5.8%	フィリピン総合	6450.04	6411.91	-0.6%	-6.0%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.356	2.7%	シンガポールST	3240.27	3332.8	2.9%	0.1%
台湾	USD/TWD	30.579	32.438	6.1%	台湾加権	17930.81	23032.25	28.5%	21.1%
タイ	USD/THB	34.256	36.759	7.3%	タイSET	1415.85	1300.96	-8.1%	-14.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2024年5月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9	3.4	1.4	1.9	2.5
日本*	-0.8	1.3	4.3	4.1	-3.7	0.4	-1.8	1.0	1.9
ユーロ圏	2.5	1.9	1.3	0.6	0.2	0.2	0.4	3.4	0.5
英国	2.1	0.6	0.3	0.2	0.2	-0.2	0.3	4.3	0.1
豪州	5.7	2.5	2.3	1.9	2.1	1.6	1.1	3.9	2.0
カナダ*	1.8	-0.9	3.4	0.7	-0.3	0.1	1.7	3.8	1.3
エマージングアジア									
中国	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9	5.2	5.3	3.0	5.2
香港	-4.6	-4.3	2.8	1.6	4.2	4.3	2.7	-3.7	3.3
インド	5.5	4.3	6.2	8.2	8.1	8.6	7.8	9.7	7.0
インドネシア	5.7	5.0	5.0	5.2	4.9	5.0	5.1	5.3	5.1
韓国	3.4	1.1	1.1	1.0	1.4	2.1	3.3	2.7	1.4
マレーシア	14.4	7.4	5.5	2.8	3.1	2.9	4.2	8.7	3.7
フィリピン	7.7	7.1	5.7	4.3	6.0	5.5	5.7	7.6	5.6
シンガポール	4.2	2.4	0.5	0.5	1.0	2.2	2.7	3.9	1.1
台湾	4.0	-0.7	-3.5	1.4	2.2	4.8	6.6	2.6	1.3
タイ	4.4	1.3	2.6	1.8	1.4	1.7	1.5	2.5	1.9

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/10	23/11	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	24/05	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.8	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8	3.9	4.0	3.6	3.6
日本	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
ユーロ圏	6.6	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4		6.8	6.6
英国	4.0	3.9	3.8	4.0	4.2	4.3	4.4		3.9	4.0
豪州	3.8	3.9	3.9	4.1	3.7	3.9	4.1	4.0	3.7	3.7
カナダ	5.7	5.8	5.8	5.7	5.8	6.1	6.1	6.2	5.3	5.4
エマージングアジア										
中国										
香港	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	3.0	3.0	4.3	3.0
インドネシア					4.8				5.9	5.4
韓国	2.5	2.8	3.2	3.0	2.6	2.8	2.8	2.8	2.9	2.7
マレーシア	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3		3.8	3.4
フィリピン	4.2	3.6	3.1	4.5	3.5	3.9	4.0		5.4	4.4
シンガポール	2.1	2.0	1.8	1.9	2.0	2.0	2.1		2.1	1.9
台湾	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ			0.8			1.0			1.3	1.0

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/09	23/10	23/11	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	24/05	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	3.7	3.2	3.1	3.4	3.1	3.2	3.5	3.4	3.3	8.0	4.1
日本	3.0	3.3	2.8	2.6	2.2	2.8	2.7	2.5	2.8	2.5	3.3
ユーロ圏	4.3	2.9	2.4	2.9	2.8	2.6	2.4	2.4	2.6	8.4	5.5
英国	6.7	4.6	3.9	4.0	4.0	3.4	3.2	2.3	2.0	9.1	7.3
豪州	5.4			4.1			3.6			6.6	5.6
カナダ	3.8	3.1	3.1	3.4	2.9	2.8	2.9	2.7	2.9	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	0.0	-0.2	-0.5	-0.3	-0.8	0.7	0.1	0.3	0.3	2.0	0.2
香港	2.0	2.7	2.6	2.4	1.7	2.1	2.0	1.1	1.2	1.9	2.1
インド	5.0	4.9	5.6	5.7	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	6.7	5.7
インドネシア	2.3	2.6	2.9	2.8	2.6	2.8	3.1	3.0	2.8	4.2	3.7
韓国	3.7	3.8	3.3	3.2	2.8	3.1	3.1	2.9	2.7	5.1	3.6
マレーシア	1.9	1.8	1.5	1.5	1.5	1.8	1.8	1.8	2.0	3.4	2.5
フィリピン	6.1	4.9	4.1	3.9	2.8	3.4	3.7	3.8	3.9	5.8	6.0
シンガポール	4.1	4.7	3.6	3.7	2.9	3.4	2.7	2.7	3.1	6.1	4.8
台湾	2.9	3.0	2.9	2.7	1.8	3.1	2.2	1.9	2.2	3.0	2.5
タイ	0.3	-0.3	-0.4	-0.8	-1.1	-0.8	-0.5	0.2	1.5	6.1	1.3

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.9	-3.8	-3.6	-3.4	-3.3	-3.2	-3.2	-3.9	-3.3
日本	2.3	2.0	1.6	2.1	3.1	3.6	4.3	2.0	3.6
ユーロ圏	-0.2	-0.6	-0.4	0.2	1.1	1.7	2.2	-0.6	1.7
英国	-3.2	-3.1	-2.1	-2.2	-2.4	-3.3	-3.3	-3.1	-3.3
豪州	0.8	0.9	1.0	0.6	0.4	0.3	-0.2	0.9	0.3
カナダ	-0.1	-0.4	-0.6	-1.0	-0.9	-0.7	-0.8	-0.4	-0.7
エマージングアジア									
中国	2.6	2.6	2.4	2.3	1.8	1.5	1.2	2.5	
香港	11.4	10.2	9.0	9.4	8.8	9.2	10.9	10.2	9.2
インド	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.1	-0.9	-0.7	-2.4	-0.9
インドネシア	0.9	1.1	1.2	0.6	0.2	-0.1	-0.5	1.0	-0.1
韓国	2.6	1.5	0.3	0.1	1.0	2.0	3.2	1.4	1.9
マレーシア	2.6	3.2	3.5	3.7	3.1	1.6	1.8	3.2	1.6
フィリピン	-5.9	-4.6	-4.4	-3.3	-2.4	-2.6	-1.9	-4.4	-2.6
シンガポール	18.8	18.0	18.2	18.2	18.5	19.8	20.2	18.0	19.8
台湾	14.2	13.4	12.1	11.9	12.7	13.8	14.9	13.3	13.8
タイ	-3.7	-3.2	-2.1	-0.9	1.2	1.4		-3.2	1.4

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2024/6/12	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	0.00	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2024/3/19	+10bp	2024/6/14	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.75	緩和: 2024/6/6	4.00	2024/6/6	-25bp	2024/6/6	-25bp
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2024/6/20	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2024/6/18	現状維持
カナダ	翌日物金利	4.75	緩和: 2024/6/5	5.00	2024/6/5	-25bp	2024/6/5	-25bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2024/6/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2024/6/7	現状維持
インドネシア	8%金利	6.25	引き締め: 2022/8/23	3.50	2024/4/24	+25bp	2024/6/20	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2024/5/23	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/5/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2024/6/27	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/3/21	+12.5bp	2024/6/13	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2024/6/12	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注)インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートから8%金利に変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行